

人類学博物館紀要 第 37 号
(ISSN 0388-8711)

南山大学人類学博物館紀要

第 37 号

南山大学人類学博物館

2019



口絵①



口絵②

巻頭言

われわれは、人類学博物館を「ユニバーサル・ミュージアムを目指す博物館」と位置付けてきた。その意味は、「誰でも楽しめる博物館＝ユニバーサル・ミュージアム」は理念としては正しい方向を向いているが、具体的にどのような要件が揃えばユニバーサル・ミュージアムと言えるのかという合意がないということである。ある学芸員に言われたことだが、ユニバーサル・ミュージアムとは「運動（ムーブメント）」なのである。

ところでこの「運動」は今広がりを見せつつある。それは2020年の東京オリンピック/パラリンピックへ向けての対応であるが、それ自体は歓迎すべきことと思っている。国立民族学博物館の広瀬浩二郎准教授が主催するユニバーサル・ミュージアム研究会（UM研）にも、新たにいくつかの博物館の学芸員が加わり、こうした広がりを実感させてくれる。

そうなる議論を次の段階に進めるべき時が来ていると思う。その次の段階とは2つで、一つはより若い世代の育成、もう一つはユニバーサル・ミュージアムを博物館の基盤として考え直すことである。

前者については、ユニバーサル・ミュージアムの運動が広がりを見せてはいるものの、やはりその定着にはもう少し時間がかかるであろうと考えるからで、次世代を担う人を育てないと、この運動自体が継続しないという危機感である。

もう一つは、既存の博物館にユニバーサル・ミュージアム的な要素を付け加えても、それは一過性のサービスに過ぎなくなる可能性が大きいいため、見方を転換し、博物館はそもそも全ての人利用可能であるべきだ、という地点から発想し直してはどうか、と言う主張である。

人類学博物館とてまだまだ発展途上であり、やるべきことは多い。だが、幸いにして博物館の基盤に「全ての人を楽しめるようにする」という考え方が据えられている。そういう意味で、人類学博物館はこれからその価値が試されることになる。

2018年
南山大学人類学博物館

目 次

巻頭言

西志賀遺跡出土の弥生土器——遠賀川式土器と条痕文系土器——

..... 黒澤 浩… 1

縄紋時代後期加曾利 B 式土器の研究（Ⅲ）——加曾利 B2 式の理解のために——

..... 大塚達朗… 15

西志賀遺跡出土の弥生土器

——遠賀川式土器と条痕文系土器——

黒澤 浩

はじめに

現在の愛知県名古屋市北区に所在する西志賀遺跡は、全国的にも知られた著明な弥生時代遺跡である。西志賀遺跡の知名度が上がったのは、もちろん、古くから知られているといこともあるが（註1）、やはり何とんでも小栗鐵次郎の報告（小栗1931）と、それに続く吉田富夫の一連の研究（吉田1933、1934a・1934b、1935a、1935b、1941）によるところが大きい。

ところで、吉田が報告した西志賀遺跡出土品の一部は、南山大学人類学博物館に収蔵され、そのうちの何点かは現在展示に供されている（註2）。

今回は、そのうちの遠賀川式土器を報告したい。人類学博物館所蔵の西志賀遺跡の遠賀川式土器には、吉田が報告した壺形土器のほかに甕形土器がある。今回はその2点の報告と、現在名古屋市博物館に収蔵・展示されている横位羽状条痕を施した甕についても併せて報告する。

1. 資料の記述と編年的位置

(1) 壺形土器（第1図1）

器高30.5cm、口縁部径18cm（復原）、胴部最大径25.8cm、底径9.3cmを測る。残存状態は、口縁部は1/5程度、頸部は1/3を残すくらいであるが、頸部以下は完形である。

口縁部は外反し、頸部でゆるく屈曲しながら、なだらかな肩部を経て胴部に至る。胴部最大径の位置はほぼ頸部から胴部の中央付近にあり、その部分からゆるくすぼまりながら底部に向かう。底部は平底である。

器面調整は、口縁部外面ではナデのあとにミガキによって仕上げられ、頸部から肩部では刷毛目の痕跡が残っているものの、やはりミガキで仕上げられている。胴部以下は刷毛目を残して、胴下半でもやや上の方では横方向に、下部では縦方向に施されてい

る。底部には特に調整痕は見られない。全体的には、頸部以下は全面刷毛目を施した後、胴上半より上を研磨して刷毛目を消しているようである。調整の方向は、垂直方向では下から上へ、水平方向では時計回りになされている。

頸部以下の内面調整は観察できないが、口縁部には横方向に刷毛目が施されている。また、頸部内面には指頭で押捺したくぼみが水平方向に並んでいる。

文様は、頸部と胴部に削り出し突帯を作出し、その上に沈線による横線が施文される。頸部の突帯上には1条、胴部の突帯上には2条引かれている。ただ、突帯の上端と下端を削り出しているため、見かけ上は頸部で3条、胴部で4条の沈線が引かれているように見える。

南山大学人類学博物館蔵。

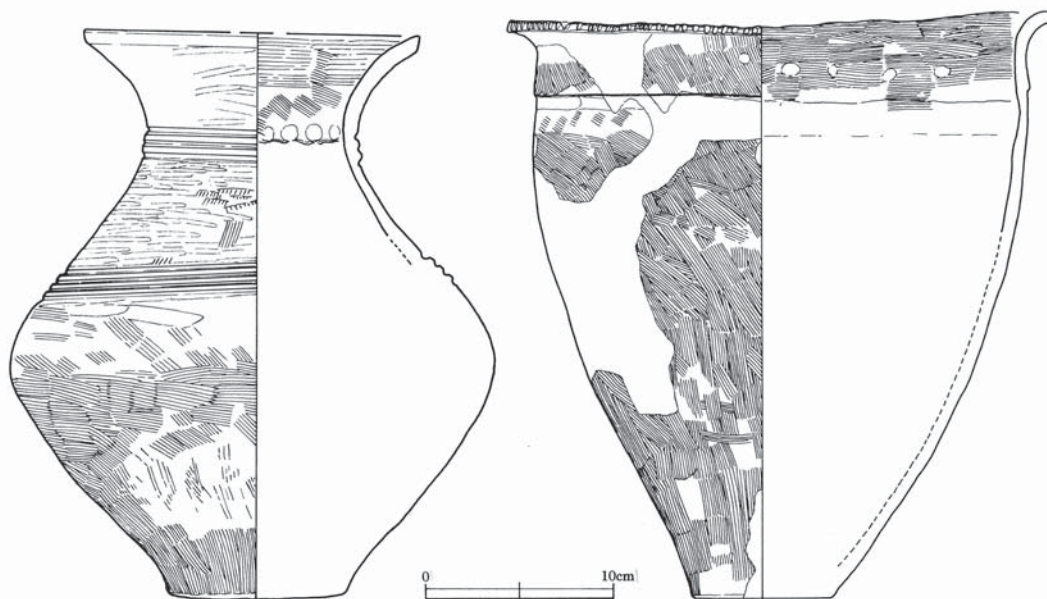
(2) 甕形土器（第1図2）

器高31cm、口縁部径29cm、底径7.4cm（復原）を測る。残存状態はあまりよくなく、口縁部の約1/3、胴部の約1/2を欠損しており、底部はほとんど残っていない。

口縁部が短く外反する、いわゆる「如意状口縁」をなす。頸部に形成された段の下あたりで若干膨らみ、最大径となるものの、ゆるやかに底部へとすぼまっていく器形をなしている。

外面は全体的に刷毛目が施され、胴上半では正面向かってやや左上がりに、胴中位から下は縦方向になる。整形の順番は全体的には時計回りに下から上に向けてなされている。口縁部内面は横方向に刷毛目整形されている。その部分には指頭による押捺痕が水平に並んでいる。胴部にはナデ上げたような痕跡がある。

文様としては口縁端部の刻み目と、口縁部下の頸部に形成された段がある。刻み目はヘラ状の工具で施文されたらしく、D字形の刻み目が並ぶ。頸部の段は壺形土器と同様に削り出して形成されたものである。



第1図 人類学博物館所蔵西志賀遺跡出土土器

口縁から胴上半にかけては焼成時の黒斑が残るが、全体的に黒く変色しており、これらは使用痕であると見られる。特に内面の底部附近には器面を一周して帯状の黒斑が見られるのは、明らかに使用時の黒斑である。

南山大学人類学博物館蔵。

(3) 横位羽状条痕甕形土器 (第2図)

本資料は、名古屋市博物館蔵のものである。

器高 20.5cm、口縁部径 22.5cm (復原)、底径 6.6cm を測る。残存状態は、口縁部で 1/2、胴部約 1/4 を欠く。色調は口縁部の一部が赤褐色だが、全体的に黒褐色を呈し、内面は暗褐色となる。口縁部は大きく外反し、胴部中位からすぼまって底部に至る。口縁部には 4 つの突起がつく。

文様は口縁部内面、口縁端部、および外面全体の条痕文である。口縁部内面には外面に施文された条痕文の原体と同じ 3 本歯の工具によって、波状文が反時計回り方向に施される。その上 (口縁端部側) には 5 本歯の櫛歯状工具による連続刺突が施される。ただし、部分的には歯数が 4 本しか現れない部分もある。口縁端部には端部の下部にヘラ状工具による押捺が施されている。

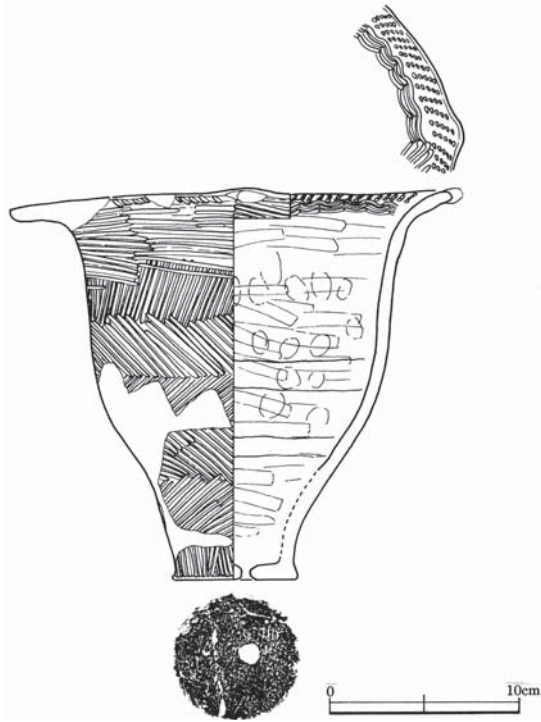
外面には 3 本歯工具による横位の羽状条痕が施されている。施文手順の説明の便宜上、最下段の縦方向の条痕を条痕 1 とし、順次条痕 2、条痕 3…として、最上段の横方向の条痕を条痕 7 としておこう。

全体としては胴下半の条痕が先に施文され、胴上半

が後である。胴下半では条痕 3 がもっとも早く施文され、続いて条痕 2、そして最下段の条痕 1 という順番で施文される。そして、その後に胴上半の条痕 4・5 が施され (この前後関係はわからない)、その後に、条痕 5 と条痕 7 が施文される。条痕 5 はちょうど条痕 4 と条痕 6 との間を埋めるようになっている。各条痕の施文方向は条痕 1 が時計回りである以外は反時計回りであり、また工具の動きからは胴下半の条痕は条痕 1 を除いては下から上に動くのに対し、胴上半の条痕は上から下に動いている。したがって、条痕施文は胴下半が先行しているものの、最下段のみ工具の動きが逆になることから、条痕 2 の施文以降、土器と製作者との位置関係が変わっていると考えられ、条痕 3・2 と条痕 1・4・5・6・7 とで施文工程を 2 段階に分けて考えることができる。

整形については、内面では指頭による押捺が胴中位を中心にみられ、その後に幅の比較的狭い工具 (指か?) によって反時計回りにナデが施される。外面の条痕文施文前の整形は見えないが、条痕 7 のまばらな条痕の下地には刷毛目等が見えないことから、ナデ整形されたものと考えられる。

使用痕については、外面では底部から 7~8cm 程度上で色調が変わり、下部はやや赤みがかった黒褐色、その上部は黒褐色となるため、火を受けたものと思われる。内面にも底部付近にススが付着しており、また底部からやはり 7~8cm くらいの位置から上が黒く変色しているの、これらを使用痕と見ることができよう。



第2図 横位羽状条痕甕（名古屋市博物館蔵）

底部には布目痕があり、また焼成後に内外両側から穿孔もされている。

(4) 遠賀川式土器の編年的位置

当該資料の型式学的特徴は、壺の削出し突帯や甕の削出し段にある。こうした特徴は、佐原真によって細分された畿内第1様式の中段階に相当することは明らかである（佐原 1967）。東海地方でも、この細分案が踏襲され、紅村弘による貝殻山式—西志賀式の編年案に従えば、当該資料は貝殻山式に相当することになる（紅村 1956）。

実際に、人類学博物館所蔵の名古屋市熱田区高蔵遺跡夜寒町地点 SD03 出土の前期土器（重松ほか編 1988）と比較すると、高蔵遺跡の壺の文様は、削出し突帯をもたず、数条程度の沈線のみ施文しており、装飾手法の差は明確である。したがって、当該資料は東海地方弥生前期土器の中では古い段階に位置づけられることになる。

ただし、近年、新出資料を踏まえた新たな編年案が提示されている中で言えば、永井宏幸による I-3 ~ 4 様式に（永井・村木 2002）、また石黒立人による遠賀川系 2 期（石黒・宮腰 2007）に相当することになり、必ずしも「前期の古い段階」という言い方が当てはまるわけではない。

弥生時代の開始をどの時点に求めるかは研究者の考

え方に左右されるところが大きいですが、ここでは近年の研究動向を踏まえて、西志賀遺跡の遠賀川式土器は前期中頃に位置づけておきたい。

(5) 横位羽状条痕甕の編年的位置

一方、名古屋市博物館所蔵の横位羽状条痕甕については、研究当初こそ縄文土器に近いイメージでとらえられていたが、まもなくそれは、吉田自身によって時期的に遠賀川式土器よりも新しい「櫛目式土器」に伴うものに修正された（吉田 1935）。この土器の研究経緯については、後に詳しく述べることにするが、編年的位置付けもさることながら、その出自・系統についても、研究史の早い段階から美濃が想定されていたことは重要であろう（吉田 1936a）。紅村弘は岐阜県美濃加茂市の牧野小山遺跡の調査に基づき「美濃型貝田町式」を設定したが、その根拠としたのはこのタイプの「深鉢」であった（紅村 1967）。

現在の研究によっても、このタイプの土器は弥生時代中期に位置づけられるものであり、石黒の「櫛条痕紋系深鉢」の③段階もしくは④段階にあたり、貝田町式 2 期・3 期に相当する（石黒・宮腰 2007）。

3. 吉田富夫の「弥生文化」研究の概観とその評価

さて、本資料は先述したように東海地方の弥生文化研究の枠組みを構築した学史的資料である。しかし、戦後は資料の増加もあって本資料そのものについて言及される機会はほとんどなくなった。

今回、そうした資料を再報告するにあたって、当該資料を報告した吉田富夫の初期弥生文化研究について概観しておきたい。

(1) 山内清男の「縄文式文化」と小林行雄の

「弥生式文化」

吉田富夫の初期弥生文化研究を概観する前に、吉田の研究がどのような研究史的背景でなされたものかを確認しておこう。それは、山内清男の「縄文式文化」と小林行雄の「弥生式文化」である。

筆者はすでにこの問題について論じたことがある（黒沢 2011a・b）。詳細は前稿に譲るが、山内が縄文土器は全国でほぼ同時に終焉するものとしたのに対し（山内 1930）、小林は弥生式の起源を大陸に求め、大陸から北部九州にやって来た渡来人が稲作を伝えたことで弥生式文化が形成され、それが東へと広まっていったと考えていた（小林 1938、森本・小林 1939）。した

がって、小林の論にしたがえば、弥生式文化の始まりは東に行くほど遅くなることになる。

これを民族論に置き換えるとわかりやすい。山内は縄文式から弥生式への移行を連続的なものとしていたから、縄文式と弥生式との間には民族的な交替は考えられていない。しかし、小林が主張するように、弥生式文化を大陸発・北部九州経由と考えるならば、そこには先住の縄文式の民族と渡来した弥生式の民族という二者が想定されなければならないことになる。

ちなみに山内は戦後になって自説を変更し、小林らの弥生式文化東漸論を受け入れた(山内 1952)。

いずれにせよ、縄文式と弥生式は、山内と小林によって別々に構想された。そして、特に東漸説に立った場合には縄文式と弥生式の接点の問題になるはずであるが、小林の一連の研究ではそのことは不問に付され、もっぱら弥生式の側の説明に終始したことは指摘しておきたい(註3)。

これから概観する東海地方の「弥生式文化」研究は、それを進めた吉田富夫自身が東京考古学会のメンバーであったことからわかるように、後者の立場に立っている。しかし、その吉田が「西志賀第一類土器」を見出したことで、小林にはなかった視点——縄文式と弥生式の接触——が問題化される契機となったのである。

(2) 「西志賀第一類土器」の発見

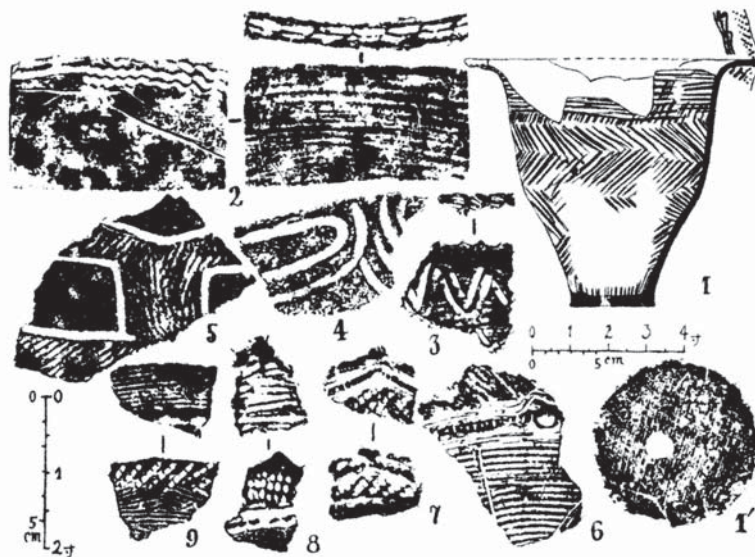
東海地方の弥生式研究は西志賀遺跡に始まる。その

出発点は1931(昭和6)年の小栗鐵次郎による報告であった(小栗 1931)(註4)。その報告では、名古屋には先住民族の遺跡(註5)と原日本人の遺跡(熱田、桜田貝塚)があるが、西志賀はそれらとは違い、「縄文式の手法を混じたる弥生式遺跡」としており、この時点で早くも縄文式と弥生式との接触を示唆している点が興味深い。

吉田富夫が初めて西志賀に関する報告を発表したのは、1933(昭和8)年のことであった(吉田 1933)。これを皮切りに、吉田は次々と西志賀遺跡とその所見に基づいた論考を発表していく。

1933年の報告では、小栗が指摘したような「縄文式手法を混じた」ものは、吉田の調査では見いだせず、「一般の弥生式遺跡より発見されるものに類似して大いなる差異を認める事は出来ない」として。しかし、ここで「不整粗大な刷毛目」の存在を指摘していることは注意しておきたい。掲載された第十図C3、3'、4を見れば、それらが今日の条痕文土器であることははっきりしている。ただし、この段階では、それ以上のことは述べていない。

この種の土器が本格的に取り上げられたのは、1934(昭和9)年の『考古学』誌上に発表された論文であった(吉田 1934)。この論文では、出土状況による土器の異同の確認をしているが、それによれば発掘区の東半と西半とで違いはあるものの、層位的な変化は見られないとしている。出土土器については、第一類と第二類に大別し、第二類をさらに第一種と第二種と



第3圖 第一類土器の實測圖と拓影である。1は小栗氏地點東隣、2-5、10、11はC地點西半、9はC地點東半、6は工事箇所、8は小栗氏地點の発見に係る。但し9は第二類第二種土器。7のみ美濃庭田発見品。

第3図 吉田 1934a 掲載の西志賀第一類土器

に細別している。西志賀第一類土器というカテゴリーはここで初めて登場している。

まず、第二類土器とされたものについてふれておくと、第二類第一種土器は遠賀川式を主体としたものであり、今回報告の壺の実測図が掲載されている。第二種土器は今日でいうところの弥生中期後半から後期の土器を含んでおり、吉田の分類が今日の眼からみれば不十分なものであることがわかる。第二類第一種土器は遠賀川式主体ではあるものの、第五図に図示された第二類第一種土器には後期のパレス壺や磨消縄文の土器が含まれているし、類例として挙げられたもののうち、日向清武と日向岩戸の2個体の壺は中期の土器である。これらを第二類第一種土器の類例としたのは、頸部・胴部にみられる「突帯紋」の存在であった。これに関して森本六爾は吉田論文の論評の中で、「突帯ある土器の一群を注意摘した点でも貴重な発見をなしている」と述べている（森本 1934）（註6）。

一方、第一類土器については次のように説明する。「第一類土器は縄紋式とも言ふべきもの、併し土質や焼成は本遺跡発見の弥生式土器の多くと特に甚しく異るとは思はれぬ」「概ね形状は単一のもののやうで、殆んど総てが図示したやうな深鉢形に属していると考えよいらしい」（吉田 1934a）。

ここで図示されたのが、今回新たな実測図によって再報告した著明な横位羽状条痕をもつ甕である。この土器を引き合いに出して、第一類土器の特徴を口縁部内面の文様と底部の布痕としている。後にこの土器はこの二つの特徴によって概念化されることになるが、一方で分類上の曖昧さはここでも見られる。例えば、吉田第3図には条痕文・口縁部内面・布目痕の他に、沈線文や磨消縄文の土器も載せている。それらが含まれている理由は、ひとえに「第一類土器は縄紋式とも言ふべきもの」だからであろう（第3図）。

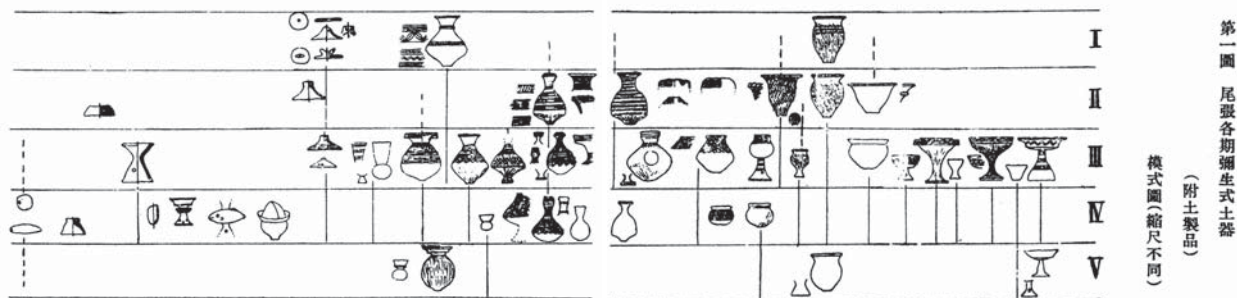
こうした曖昧さを孕みながらも、なお、西志賀第一類土器が設定された意義は大きいといわなければなら

ない。それは本論文の続編において、第一類土器を「……尾三海岸地方の縄紋式末期と目せられる遺跡発見土器に全く通有なもの」とし、新しい弥生式遺跡発見の土器には見られないことも加えて、「……稍年代の古いもの」と見ていること、そしてそのことから西志賀遺跡出土土器の特質を「縄紋土器より弥生式土器に変化する姿を如実に見せている」ものとしたからである（吉田 1934b）。

つまり、「西志賀第一類土器」の設定は、本来別々に構想された縄文式文化と弥生式文化を接続する役割を果たし、縄文式から弥生式への移行を課題として設定することを可能にしたのである。

(3) 東海地方弥生文化の型と時期

続く 1935（昭和 10）年の論文では、西志賀遺跡における層位と地点間での土器の違いから「時期を示すと考へられる」5つの文化型が設定された（第4図）（吉田 1935a）。そのうちのⅠは「遠賀川系のものに限定」とされているが、ここに西志賀第一類土器は含まれていない。それが属するのは、櫛目式第一種土器と西志賀第一類土器とが主たる形式となるⅡの型であるとされるが（註7）、その論拠は示されていない。西志賀遺跡内でのあり方を地点と層位によってみても、第一類土器は遠賀川式とも櫛目式第一種とも混在している（註8）。そして、櫛目式第一種土器の中に磨消縄文の土器があることから、そこに「縄紋文化の影響」を見出し、「西志賀第一類土器と共に、縄紋土器の影響を受け」たものをされたのである。ここでは、西志賀第一類土器が縄文土器の影響を受けているとともに、櫛目式第一種土器も縄文土器の影響を受けていると見なしている点に注意しておきたい。つまり、文化を「型」としてみたとき、Ⅰの型は遠賀川系であるから、西志賀第一類土器はそこには入れられず、縄紋土器の影響を受けた櫛目式という意義付けからⅡの型に入れられることになったものと思われる。



第4図 吉田 1935a に掲載された弥生式土器の編年表

前章で検討したように、本資料は貝田町式の後半に当る土器だから、吉田による編年的な位置付けの変更は正しいといえる。しかし、同時に第一類土器設定の意義もやや変わってしまったともいえるのである。

(4) 土器と文化の系統

続く「尾三地方史前土器の一二の種類」では、第一類土器を三種に分類したとするが、説明は第一種と第二種しかない。このうちの第一種が従来の西志賀第一類土器であり、第二種はさらにⅠ～Ⅲ(Ⅳ)に分けられている(吉田 1935b)。そして、「尾三平野地方史前遺跡」出土の土器には、「純正な縄紋土器」「弥生式土器」「西志賀第一類第二種土器に酷似した性質のもの」の三者から成るとしている(註9)。ここでいう西志賀第一類第二種土器は、貝殻を用いた土器であり、「縄紋式文化の最末期に属する」ものとされる。そして、この種の土器は、尾三平野地方の「すべての史前遺跡殊に貝塚に分布する」ものの、そのあり方は、第二種土器を主体として少量の「関東薄手式を伴う」のが普通であり、保美や鳴海(雷貝塚)ではそこに弥生式土器も加えるものとする。したがって、第二種土器の位置づけとしては、「関東薄手式土器の盛行期と早くて同時期、多分それより稍降った時期」であり、「その下限は…金石併用期」であるとした。つまり、第一類第二種土器は「関東薄手式」の時期と「弥生式土器」との間をつなぐ一時期を代表するものとされたのである。

しかし、この論理でいくと、尾三平野地方に普通に分布するのは西志賀第一類第二種土器であって、従来の西志賀第一類土器そのものである第一類第一種土器ではないということになる。では、西志賀第一類第一種土器はどのように考えられていたのか。吉田によれば、西志賀第一類土器そのものは、まさに西志賀遺跡と朝日遺跡とで成立したものなのである。吉田は次のように説明する。

「……縄紋系の之に酷似した類型の土器の形式(第一類第二種土器)が、西志賀・朝日に於ける弥生式文化に合一して、それと恰も当時両遺跡に盛行していた所謂遠賀川系土器の深鉢形土器との、形態・紋様等の強い類似が、此の西志賀第一類土器を等しく盛行せしめた理由の少なくとも一部を形つくれた、……」

このことから吉田は、尾三平野地方にはもともと西志賀第一類第二種土器が縄文式末期から主体的に存在していたが、それらが西志賀と朝日で遠賀川系土器をもつ弥生式文化といっしょになったことで、西志賀第

一類(第一種)土器が成立するものと考えたのである。あくまでも西志賀第一類土器とは西志賀と朝日とで形成された土器なのであり、第一類第二種土器はその成立の前提条件であった。

続いて、吉田は尾張の周辺地域である美濃・三河・伊勢の弥生式文化を概観する(吉田 1936a、1936b、1937)。美濃については、西濃(大垣市周辺)と中濃(美濃太田周辺)に地域区分し、西濃では西志賀第一類や櫛目式系第一種などの古式弥生式土器を欠き、櫛目式系第二種のみ存在すると指摘し、そのことから尾張との間に「一般的な伊勢湾沿岸的な類似」はあるが、直接の交渉は少なく、伊勢より北上したものと考えるのが自然、としている。こう考えた背景には、やはり西志賀第一類は西志賀・朝日に起源するという前提があったからで、それを欠く西濃の弥生式文化を尾張と結びつけることができなかつたためと思われる。

一方、中濃については西志賀第一類が主でこれに櫛目式系第一種が続くという様相を示すが、遠賀川系がないという状況から、尾張の状況(熱田・二子・町屋)を挙げる。つまり、西志賀と朝日を除くということに似るとする。そしてこれらは「縄紋式の遺物と同一遺跡に存在」し、縄紋式の系統を色濃く残すが、それは櫛目式第二種の時期まで続いている。それと同時期に、「純粋に弥生式の遺物のみで一遺跡を形づくる場合」もあり、縄紋式の系統を引くものと、弥生式のみで構成されるものとの二者が併存する状況を指摘している。その時期は、「尾張弥生式第二期末又は第三期古型及びそれ以降」であり、「弥生式文化は太田町附近に、稍早く入った事になるようである」としている。

ここで重要な点は、西濃地域においては遠賀川系土器、櫛目式系第一種土器といった古式の弥生式土器が見られないことから、逆に「尾張の古式弥生式文化が、美濃より南下したのではなくて、伊勢より北上したもの」としている点と、中濃地域に存在する西志賀第一類土器は「其の起源を尾張西志賀又は清洲朝日に置く事は、もはや言を要せぬ所であろう」と強調している点である。後者について補足的に説明すると、中濃には縄紋式の系統は強いものの、西志賀や朝日で西志賀第一類土器の発生因となった遠賀川系土器を欠いているということは、この地域では西志賀第一類土器を成立させる前提の一つがないということになる。したがって、中濃地域において西志賀第一類土器は発生し得ないという結論にいたるのである。

この議論との関連から、発表時期は前後するが、先に伊勢の弥生式文化について論じたものを見ておこう。

伊勢では遠賀川系土器が存在し、それが大和や尾張同様、「一つの文化型・時期を形成」する。一方で、伊勢では西志賀第一類は見つかっておらず、こうした尾張特有の要素が伊勢にはないことから、尾張から伊勢へという文化伝播の方向は考えられないとする。だが、文化的には畿内の影響が強いものの、尾張に近く、尾張・三河・美濃と同じ文化圏に属するが、文化内容は尾張よりも貧弱に感じられることから、尾張を中心とした文化圏の「縁辺を成すもの」としている。吉田はあくまでも尾張中心に発想していたのである。

三河では、豊川下流域の平野（東三河）と碧海台地・幡豆などの台地・平野地帯（西三河）とに地域を区分し、それぞれを対比する。

東三河では西志賀第一類類似の土器が櫛目式とともに発見されているものの、多くの変種がこの地域では普通にあって、「縄紋式に属するのか或は弥生式に属するのか、共存遺物を明確にし得ない限り決定は困難」としている。しかし、この地域の縄紋土器の特徴を、深鉢形で貝殻条痕を以て全面を蔽われ、口縁上面・外面に刺突紋の類をもつものとした上で、それ以外の内面紋様や口縁部の突帯における指（もしくはそれに似た）による大形圧痕類の手法をもつものがあれば、「弥生式として差支ない」としている点は重要であろう。ここで吉田は西志賀第一類土器に類似するが、それとは区別される一群の土器に対しても、弥生式土器と判別する基準を提示しているのである。

一方、碧海・幡豆地方のものについては、弥生式の遺跡が縄紋式の遺跡と「相重って存在する」ケースは見られず、西志賀第一類土器類似の土器もないとしている。こうした状況は、この地域が「完全に孤立し、又何等型式学的にも連絡あるものなく、弥生式文化の貧弱ながらも純粋な姿をよく保っているのである」と説明している。その理由としては、「純然たる農耕経済に入ってからの新しい進出と見なせばよい」が、それには「環境に基づく理由か何か」あるのかもしれない、「其の環境が新しい経済型式には適していた為であるとも想像されよう」としている。

それに対し、東三河では同一地点に縄紋式・弥生式の遺物が混在している状況があり、それが時期差かどうかははっきりしないものの、そのことから、「縄紋式文化を持っていた民族が早く居住していて、弥生式文化を新しく受け入れたと考えねばならなく」なり、「尾張弥生式第二期以降の活発な膨張がもたらした必然の交通若しくは征服の結果と推察されてもよからう」としている。ここで、縄紋式と弥生式との「接

触」が問題化されたわけである。しかし、吉田は縄紋式を持つ民族と弥生式を持つ民族を異民族とは考えておらず、「大体としては一貫した血統の民族が二つの文化を相続いで享有した」と考えている。

1939（昭和14）年、杉原荘介との共著で「東海地方先史時代土器の研究」を発表した（吉田・杉原1939a）。この論文は、雄山閣から出版された『人類学・先史学講座』に収録されたもので、概説的な性格の論文である。ここでは、東海地方の縄文早期から弥生時代に至る土器が説明されているが、ここでの概観は関係箇所にとどめたい。

一つ重要な点は、本論文が「条痕（原文では條痕）」という用語の初出らしいことである。もちろん、本論文以前に「条痕」の語は使用されていたが、それは関東地方、特に三浦半島における縄文早期土器の研究においてであった。事情については推測するしかないが、「貝殻条痕」と呼んでいたアカガイの先端を使った（とする）土器表面の調整痕跡との類似からこの語を借用したのではないかと思われる。それはまず、今日の上ノ山式・粕畑式といった土器型式をまとめた形で「爪形条痕繊維土器」として使われ、晩期の土器についても「半截竹管紋系条痕土器」として使われている。ここでは「半截竹管紋系条痕土器」から見ていきたい。

半截竹管紋系条痕土器は雷式土器と雷貝塚出土土器をもって付けられた名称である。ここでは雷式の実体はともかく、弥生式との関係について述べられている。まず、前提としては雷式と弥生式との共存は珍しいことではないとするが、雷式に共存する弥生式土器は東海地方における第二、第三ないし第四の時期に相当するもので、そのことから「弥生式の初期には殊に東三河遠江では更に遅れて雷式土器文化も並び行われ其の間互に交渉があり、後に始めて遂に代った」として、縄文式である雷式と弥生式との併存を認めたのである。そして、そうした現象が起きるのは、東海地方が関東・関西の両方からみて周辺を成し、そのため互いに影響を受けたために「雑多なものが渾然として存在する」と同時に「両者の中間的な性質を具えるもの」が生じるという文化的特異性の故であるとする。

一方、弥生式についてはどうか。まず、遠賀川式についてはここでは「篋描紋凸帯紋系土器」と分類されており、それについては畿内北（地？）方よりの伝播と尾張における縄紋式との接触が述べられているだけだが、興味深いのは西志賀第一類土器についてである。西志賀第一類は「条痕紋布痕土器」とされている

ものであるが、雷式の条痕文土器とは区別されている。

そして、雷式の条痕が「第二の時期に於いて嘗て西志賀第一類と称えた弥生式条痕紋布痕土器及び諸種の条痕紋土器として影響を與へ」たものであるとする。西志賀第一類が縄文式の系譜にあることはすでに述べていることだが、ここではその由来を特定したことになる。また、東三河に分布する「稍大形且厚手であり、口縁押捺ある凸帯を廻らし底面に布痕なき」型式は雷式と区別し難いものであることも認めている。

本論文は、吉田のこれまでの主張をまとめたものといってもよいだろう。やや面倒な分類名称は、一般の読者を意識した結果かもしれない。しかし、本論文で注目したいのは杉原荘介との共著であるという点である。杉原とはすでに天白川流域の縄文遺跡の踏査報告で共著としており（吉田・杉原 1937・1939b）、今回が2回目の共著となる。前稿は縄文時代遺跡・遺物の報告であったが、この論文で弥生式に言及するに至った。おそらく、杉原にとっては、こうした吉田との一連の作業が、後に接触式文化を構想するソースとなったのであろう。

(5) 「弥生式文化」の多様性

1941（昭和16）年になると、吉田は立て続けに4本の報告・論文を発表する。報告は三河丸塚遺跡（吉田・伊藤 1941）と知多の汁谷峡遺跡の報告（吉田 1941a）であるが、吉田の弥生式文化観の一端を垣間見ることができるので、簡単に触れておこう。

汁谷峡遺跡では条痕文ある土器があり、これを古式弥生式土器として西志賀等と比較をし、遠賀川式と櫛目式の初期の土器とが「全く同じ性質を具え」ているという。さらにそれらは駿河の丸子セイゾウ山や佐渡の土器、信州の庄之畑式にも「一脈相通ずる」ものであるとする。つまり、これまで東海地方に限られていた視野が、信州や静岡での研究の進展によって拡大し、そして遠賀川式や櫛目式を含まない「条痕紋を主体とする甕鉢無頸壺なる略ぼ単一にして統一ある特質を具え」た一群を新しい文化型としてとらえたのである。そして汁谷峡遺跡の土器を、当時駿河で設定されていた丸子式に比べて「条痕紋がそれ程装飾的に整理されておらず、且つ未だ発達していないのを特徴」として「峡式」を提唱している。

もう一編の丸塚遺跡の報告は、今日でいうところの瓜郷式土器の遺跡であるが、ここでは「磨消縄紋丹彩壺」に注目している。この土器は現在の嶺田式にあたるが、これを「縄文式の影響ある弥生式土器」として

信濃・栗林の土器と関連づける一方、他の壺・甕の系統については西志賀や朝日と一連のものであって、そのことは尾張の古式弥生式文化の東方進出の一基地であることを示しながら、信濃との関係も示しているとしている。つまり、丸塚遺跡における「複合」状況は、三河の古式弥生式土器の一標式を成すと同時に、尾張・信濃との関係を示すものと考えられているわけである。

そして、同じ年、吉田の弥生式文化論の集大成ともいえる「尾張西志賀に於ける初期弥生式文化の複合」が発表された（吉田 1941b）。この論文では、西志賀の初期弥生式文化では系統の異なるものが複雑に錯綜しているので、それらを一一つ分析するのが目的であった。ここでの土器に対する着目のポイントは形態だけでなく、「装飾技法及び単位の構成」と「好み」である。

系統を分析して説明していくということは、系統を示すような分類が前提でなければならない。吉田はここで形態についてa～eの5項目6種、装飾技法については7種、装飾単位については8種に分けており、それらは大きくまとめると（1）西方に根源するもの、（2）東海地方で発生したもの、（3）縄文式の弥生式的変容、になるという。

ここでは一つ一つの系統について紹介することはせず、条痕文土器に関係する部分のみ見ていこう。まず太頸壺では純正の遠賀川式のほかに「縄文式土器の要素を取入れて条痕の技法を襲用し」たものが挙げられている。条痕文土器に太頸壺があることが初めて言及されている。

かつての西志賀第一類土器はここでは布痕内面文甕と呼ばれているが、この名称からわかるように着眼点を外面の条痕文ではなく、底部布痕と口縁部内面文様に置いている。このことから、この土器は従来のような縄文式と遠賀川式との接触によるのではなく、駿河の丸子式土器の影響を受けたものという形で、その系統が修正された。吉田の言葉を借りれば「縄文式土器の影響を受けた弥生式土器から再び派生した」ものであるということになる。

西志賀では地点を異にして、遠賀川式を主体として条痕文太頸壺・甕を従とする様式と、櫛描・篋描流水文系文様、磨消縄文帯・磨消刷毛目文を有する細頸壺に布痕内面文甕が伴う様式とに区分され、前者を西志賀前期、後者を西志賀後期と呼び変えた。前者は、いうまでもなく、遠賀川式と条痕文土器が伴っているので、それは遠賀川式と縄文式との接触を示すものであ

るとされる。

このような尾張の状況は、小林行雄等が言った「斉一性」を示す状況とは異なっており、この地域では「初期弥生式の荷担者は、縄文式伝統を負いながらも、新しい弥生式文化に染まった」ものとされた。その場所こそが西志賀であり朝日であって、「そこで創成された新たな様式が諸地方に拡散していった」と理解されたのである。吉田の尾張中心主義はここでも変わっていない。

1942（昭和17）年になって、「弥生式土器に於ける縄文式装飾技法の影響」と題した論文が発表された（吉田1942）。これは東海地方においてなぜ縄文式と弥生式の要素が混交するのかを考えた論文である。

まず、土器の要素として器形と装飾を挙げ、それぞれを機能上の要求に基づいているために変化の少ない器形（形態の不可変性）と「美的欲求の赴くままに夫々の時期の好みを表現した」装飾（装飾の可変性）として性格づける。そして、縄文式との接触があったにもかかわらず定型性を崩さなかった西日本と、「協同的馴化的な態度」によって装飾の可変性の原則の下に著しい変容をした東日本とを対比する。この対比は、要するに文様装飾が乏しい西日本とそれを多く保持していた東日本という比較に置き換えることができるだろう。

しかし、吉田は東日本については縄文式装飾技法を採用しながらも、「縄文式的な好みを取り入れなかった」としており、その理由は「弥生式の本質に即した構成」を取ったからだという。この「弥生式の本質」が指すものは必ずしも明確ではないが、櫛描技法の波及が文様の自由度を高めるきっかけとなったという説明や、「主として櫛描による重線帯の装飾効果が一つの地文的な意味を持つところから之に代えるに縄文地を以てした」という一文からみて、櫛描文特有の水平方向への展開に縄文を採用するなどの点を念頭においていることがわかる。

だが、こうした縄文式装飾技法の影響は限定的であった。なぜならば、土器の変化は「経済的始め様々の基礎的相違が生活様式の上に現れている」のであれば、もっとも重要なのは機能上の要求で生じる形態の不可変性なのであり、それは弥生式としての定型であったからである。逆に言えば、文様装飾についてはいかに縄文的な要素を取り入れて「一見縄文式土器との外見上の区別がつけ難いような様相」を示していながらも、「実は精神的な意味からは本質的な弥生式の産物として一向に異様なものではなかった」というこ

とになるからである。したがって、ここで言われていることは、西日本と東日本では弥生式と縄文式との接触の仕方の違いであり、接触によって変容したかに見える東日本の弥生式も、生活様式の変化に伴う要請から、機能に基づく形態は弥生式を取り入れていたのだ、ということになるであろう。

結局、それは1941年の論文「古代日本に於ける美術精神の発展」（吉田1941c）で述べられていたように、「技術的、社会組織、精神共に優れた文化階梯の上からも高い青銅器時代文化が、石器時代文化を全面的に駆逐したことは容易に想像される」という言葉に結びつく。縄文式文化は、あくまでも弥生式文化の前に排除されるべき存在だったのである。

4. 吉田富夫による弥生土器研究の今日的意義

さて、前章で紹介した吉田による一連の弥生研究は、戦後紅村弘に引き継がれて体系化されていき（紅村1956）、今日に至る東海地方の弥生時代理解の枠組みを提供したと言ってよい。そうした中で、本稿で注目したいのは、吉田による「接触」という概念である。それについて検討する前に、杉原荘介の「接触式文化」にふれておこう。

(1) 接触式文化

「接触」という語は、杉原荘介が『原史学序論』で「接触式文化」を用い（杉原1946）（註10）、田中國男が茨城県女方遺跡の研究の中で「接触文化」を用いたことが知られている（田中1944）。

杉原による「接触式文化」の発想が、吉田による「接触」をそのオリジンとしている可能性については前章で述べた。あくまでも推測であるが、東京考古学会を通じて知り合い、2人で名古屋市の天白川流域の縄文時代遺跡の調査をしたり（吉田・杉原1937・1939b）、先述の『人類学・先史学講座』を共著で著したりする中で、意見交換が進んだと考えるのは不自然ではないだろう。

しかし、杉原の「接触式文化」論は小林行雄によって厳しい批判にさらされる（小林1971）。小林によれば、杉原が言うように「縄文式文化における弥生式文化受容の姿」を「接触式文化」と呼ぶことは理解できるとしながらも、「かりに東部日本の弥生式土器を「接触式土器」とよぶとしても、さらに第二期・第三期の中部日本からの東漸を認める以上は、そこにも文化の接触現象を考えたのであろうか」と指摘する。そ

して、それを考えなかったとすれば「接触文化」と名付けた意義は薄弱となり、また考えたとすれば今度は「接触文化と弥生文化との接触を説くことになりかねない」としたのである。

こうした批判により、杉原の「接触式文化」論は葬り去られることになった。だが、この小林の批判は自身へのブーメランでもある。なぜならば、前章の冒頭でも指摘したように、小林の弥生文化論は一貫して北部九州に起源した文化が東漸したという説明モデルである。そのように考えるのであれば、当然、弥生文化（この場合は遠賀川式土器を持った集団と言い換えてもよい）を担った集団の移住によって、その移住先にいる在来の文化集団（この場合は在地の縄文土器を持った集団と言い換えることができる）とが遭遇・接触する可能性は含意されていなければならないからである。そして、杉原の「接触式」も、正にその時点のことを言っている。つまり、「接触式」の本当のオリジンは小林自身の弥生文化論の中にすでに仕込まれていたものと見なければならない。

杉原も吉田も、弥生文化の成立については、森本六爾と小林行雄が構築したモデルを基本的に踏襲したのである。それに対する小林の批判は、そのことに無自覚である。

だが、杉原の「接触式文化」に問題が多かったことは事実である。それは『原史学序論』の方法論に関することでもある。

『原史学序論』は、出版当時から難解な書物として知られていた。確かに「形態論」「型式論」「様相論」などの「原史学の方法」の部分には読みにくい部分が多々あることは確かであろう。だが、この本の目的は第2版の各論を読めばはっきりしている。それは、「縄文式文化」と「弥生式文化」（この場合は西日本の弥生文化）との接触によって東日本の「弥生式文化（＝接触式文化）」が生じたことを説明することにほかならなかった。そして、その内容を簡単にまとめるならば、それぞれの文化は、「限定者」として仮定される人間もしくは人間集団に対応するから、結局のところ縄文式文化は縄文式民族に、弥生式文化は弥生式民族に帰せられることになり、接触式文化はこの2つの民族集団の正に「接触」によって生じたことを説明しようとしたのである（註11）。

こうした杉原の構想に対してはすでに和島誠一が的確に指摘したように、ある文化的まとまりを特定の人間集団に結びつけてしまうと、「文化の交替を人間の移動によって説明せざるを得ぬ」ことになるのである

（和島1947）。

杉原の失敗は、もちろん考古資料と人間集団とを安易に1対1対応させようとしたことにもあるが（註12）、それに加え、「縄文式文化」「弥生式文化」の担い手をそれぞれ「縄文式民族」「弥生式民族」と捉えて、「接触」の界面を拡大化・抽象化してしまったことにある。溝口孝司は、こうした「〈説明〉する枠組み」は前期近代の特徴的な説明モデルであるとしている（溝口2018）。

（2）吉田富夫の「接触」

杉原荘介は「接触」という概念によって文化変化を説明することに失敗したが、吉田富夫の「接触」はどうかであろうか。吉田による「接触」は戦後になって、杉原の「接触式文化」が消滅していくことと歩調を合わせるかのように使われなくなる。だが、杉原と吉田の「接触」に対する考え方を比較してみるならば、吉田の「接触」概念の有効性を認めることができるかもしれない。

先述したように、杉原の接触式文化はその「接触」の界面が抽象的で広すぎることで失敗した。だが、吉田の場合、東海地方の初期弥生式文化という限られた地理的範囲と時間的範囲で生じる現象を説明するための手段として「接触」を用いたことが幸いしていると言える。つまり、吉田のいう「接触」は具体的であり、吉田の発言を今風に読み替えるならば、「○○型式と〇〇型式の接触によって××型式が生じた」という言い方になり得るからである（註13）。

森本六爾や小林行雄の弥生文化観に立てば、文化的背景を異にする集団（共同体）どうしの遭遇・接触は必ず起こる。そして、東海地方を含む西日本一帯で見た場合、遠賀川系土器を持つ集団と在地の集団とがそれに相当することになる。現在、遠賀川系土器の出自についても、必ずしも朝鮮半島―北部九州の単一系譜でない可能性が指摘されているので、遠賀川系土器の系統については別な理解があり得るかもしれない。しかし、とりあえず東海地方について言えば遠賀川系土器をもつ集団と在地の土器を持つ集団とはその出自を異にしていることは首肯できるだろう。東海地方ではそうした状況が比較的明確であり、吉田が研究史の早い段階で、そのことに気づいたのもそうしたことが背景にあったのである。

（3）「接触」概念の再評価

おそらく人類誕生以来、世界中で、全く他者との接

触なしに生きてきた人はいないであろう。人類は移動を常とし、他者との遭遇・接触を繰り返してきた。それに対して日本列島の住民だけが例外ということはないだろう。実際に、2017年に行われたシンポジウムでは、南信地域の寺所式・阿島式の中心的な器種である細頸壺のほとんどが遠江地域からの搬入品であることが明らかとなり（鈴木2017）、また筆者も瓜郷式の細頸壺が同様に三河地域から伊那谷へもたらされていることを確認している（黒澤2018）。こうした動きは、一時的かつ特殊なものではなく、弥生時代の社会の在り方を考える前提とすべきものであろう（註14）。

そう考えるならば、小林行雄が杉原荘介を批判したように、「第二期・第三期の中部日本からの東漸」を想定する必要もなく、また、すでに生じている接触式文化と弥生文化とが接触をすることを認めるのかと言った、半ば言葉遊びに陥ることなく「接触」概念を用いることが可能になる。つまり、「接触」という出来事を、考古資料が変容する具体的な界面で考えようというものである。

まだ十分な検討を経ていないが、一つ私見の仮説を述べてみたい。あくまでも「私見の仮説」なので、研究史的検討や、資料の収集・検討が不十分なことはお断りしておく。それは遠賀川式土器と条痕文土器の関係である。

これまで両者は別系統のものと捉えられてきたし、その理解は基本的には正しいであろう。だが、両者の関係を、稲作農耕民を主体とする（註15）遠賀川式土器集団と非稲作民としての在地集団の接触として捉えたと、次のように整理できる（註16）。

- ①東海地方における遠賀川式の出現と条痕文土器の成立（櫛王式）は軌を一にしている（同時期である）。
- ②遠賀川式との出会いが単なる遭遇・接触であれば、在地土器の製作者にはモデルチェンジする必要性はない。
- ③在地集団は、馬見塚式段階まで保持していた突帯文土器を失っている。
- ④条痕文土器は著しく変形するが、遠賀川式土器自体に大きな変化はない（註17）。
- ⑤条痕文土器に大型壺が出現するが、遠賀川式の器種構成には大きな変化はない。
- ⑥水神平式の甕の口縁の外反は、遠賀川式の甕の口縁の外反と相同である。

こうした現象が、遠賀川式土器と条痕文土器との接触の界面で生じているのである。このことを説明する一つの解釈は、条痕文土器の成立は、稲作民側からの

リクエストに応える形で創りだされたのではないか、という可能性である。そのときに条痕文土器以前の突帯文土器製作で持っていた手法のいくつかを再編する形で創りだしたのが櫛王式であり、その改良型が水神平式であったといえる。

しかし、この説明ではなお、条痕文を発達させた理由については答えられていない。実はそこに紅村弘の「条痕顕示論」導入の可能性が開ける（紅村2005a・b・c）。「条痕顕示論」には反対意見や異なる理解も多く（永井2007）、筆者も紅村の主張をそのまま受け入れることにはためらいがある。だが、ここで述べた状況の中で遠賀川式土器を持つ集団の要請を受けて在地集団が条痕文土器を成立させていると考えるならば、そこに差異化の指標としての条痕文を考えることは十分に可能であろう。

おわりに

西志賀遺跡出土の遠賀川式土器およびかつて西志賀第一類土器とされた横位羽状条痕甕の報告を通じて、吉田富夫の業績を再検討し、吉田の考え方の中で「接触」という概念について再評価を試みた。

本稿は本来論文化しようと思っていたテーマではなく、様々な事情からまとめた一種のスピン・オフのようなものである。したがって、特に後半部分については検討を深める間もなく書かざるを得なかった。今後、本来のテーマも含めて、今後検討を重ね、個々で提出した仮説の是非を問うていきたい。

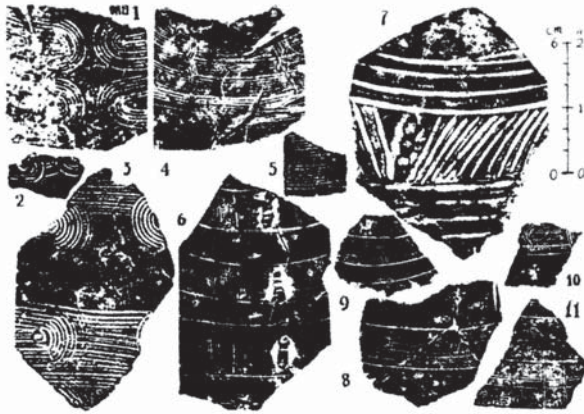
本稿を草するに当たっては多くの方々に助けていただいた。ここでは文献収集に協力してもらった永井宏幸氏（愛知県埋蔵文化財センター）と西志賀遺跡出土の横位羽状条痕甕の実測でご助力いただいた川合剛氏（名古屋市博物館）に特に感謝したい。

註

- 1：紅村弘によれば、天保14（1843）年の『尾張志』に貝殻が多く出てくるとの記載があるという（紅村・吉田1958）。
- 2：そのうちの1点である銅鐸形土製品についてはすでに報告した（黒澤2013）。
- 3：小林と藤澤一夫の共著による「尾張西志賀の遠賀川系土器」（小林・藤澤1934）では、西志賀の遠賀川系土器群をその最も変形した姿であろうとの想定のもとで

分析が進められている。そこには、変形した姿とはいかなるものか、またそれにもかかわらず残る「古い約束とは何か」という問題意識がある。

- 4：紅村弘に直接聞いた話によれば、西志賀貝塚の発見者は藤沢一夫であったという。藤沢は当時熱田高倉（蔵）に住んでおり、勤務先である県庁から歩いて西志賀に通ったという。その後、藤沢が四国に移ってしまったため、西志賀貝塚の発見者も小栗や吉田ということになったのだという。
- 5：東二葉町の貝塚、東区の長久寺貝塚を指すものと思われる。
- 6：森本は第一類土器の意義にはまったくふれていない。小林同様、森本の日も常に弥生式の側にある。
- 7：「櫛目式第一種土器」というカテゴリーはこの論文が初出である。吉田 1934b に掲載された第 8 図 1・第 11 図・第 12 図 2-6、8-11 などを見ればそれが今日の貝田町式を中心とした一群であることはわかる（第 5 図）。その位置付けは第二類第二種土器に先行するものとされている。



第 12 図 流水紋系紋様拓影 (1 朝日発見)
第 5 図 櫛目式第一種土器 (吉田 1934b)

- 8：ただし、朝日でのみ下層における遠賀川式、上層での第一類と櫛目式第一種の出土が述べられているので、あるいはそれが根拠だったのかもしれない。
- 9：「西志賀第一類第二種土器に酷似した性質のもの」は原文では第一類第二種土器の説明のあとに「……以上のような土器に酷似した性質のもの」となっているが、この文脈では「以上のような土器」が西志賀第一類土器全体を指すのか、第二種土器だけをさすのかが読みとりにくい。ここでは後段の文章との対比から第二種を指すものと判断している。
- 10：『原史学序論』は初版が 1943 年に出版されているが、「接触式文化」の章が立てられたのは 1946 (昭和 21) 年版からである。
- 11：杉原荘介の『原史学序論』については、機会を改めて論じてみたい。
- 12：これは何も杉原に限ったことではなく、欧米の考古

学でもそうした解釈は多いし、日本でも依然として同様な論調は多い。

- 13：もちろん、このことに吉田自身が自覚的であったかどうかはわからない。1941 年の論文から読み取れるのは、むしろ杉原に似た構想だった可能性の方であろう (吉田 1941c)。本文中でも述べたように、吉田が対象としたのが東海地方という限られた範囲であったことで、民族論の罠に陥ることを辛うじて免れたといつてよいであろうか。
- 14：近年の人文科学諸分野では、文化的背景の異なる集団が接触する場としての「接触領域 (コンタクト・ゾーン)」という概念も提起されている (吉田 1999)。考古学や歴史学の分野でも、例えば確実に文化的背景の異なる共同体どうしの遭遇・接触といえるアイヌ民族と日本人 (和人) との関係が「文化接触」として捉えられている (宇田川 1989)。あるいは、言語学では異なる言語集団の遭遇・接触によって「ピジン語」「クレオール語」といった混成言語が生じることはよく知られている (田中 1981)。これなどは、考古学的な型式の変化・変容の理解に応用できる可能性がある。
- 15：この場合の「主体」と言う言葉には、紅村らが使う「主体性」ほどの意味を与えていない。中心として、ほどの意味である。
- 16：このように考えると、実は条痕文土器の成立地には、遠賀川式土器が存在していなければならない、ということになる。実はこれに関して大参義一が興味深い指摘をしている (大参 1972)。大参によれば馬見塚遺跡 F 地点で 1 類 A に分類された条痕仕上げの粗製土器は尾張では一般的だが東三河では発達していない、ということの詳細に検討し、追認しうるかどうかの確認作業は筆者にはまだできていない。しかし、可能性としては、条痕文土器の成立地は尾張地域であるということになるか。かつて吉田が西志賀第一類の成立地を西志賀や朝日と考えたように。
- 17：ここには金剛坂式やいわゆる削痕土器 (三井式) などについては、説明を単純にするために含めていない。

参考文献

- 石黒立人・宮腰健司 2007 「伊勢湾周辺地域における弥生土器編年の概要と課題」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会
- 宇田川洋 1989 「北方地域の考古学的文化接触」『民族接触北の視点から』六興出版
- 大参義一 1972 「縄文式土器から弥生式土器へ——東海地方西部の場合—— (I)」『名古屋大学文学部研究論集 LVI 史学 19』名古屋大学文学部
- 小栗鐵次郎 1931 「銅鏃を出した名古屋市西志賀貝塚」『愛

- 知県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第九、愛知県
- 黒沢浩 2011a 「遠賀川式」の思想『南山大学人類学博物館所蔵考古資料の研究 高蔵遺跡の研究/大須二子山古墳と地域史の研究』南山大学人類学博物館
- 黒沢浩 2011b 「縄文/弥生考——縄文・弥生移行期は可能か? ——」『縄文/弥生移行期の社会論』伊勢湾岸弥生社会シンポジウム・前期篇、伊勢湾岸弥生社会シンポジウムプロジェクト
- 黒沢浩 2013 「西志賀遺跡の銅鐸形土製品」『南山大学人類学博物館紀要』第31号、南山大学人類学博物館
- 黒澤浩 2018 「伊那谷の瓜郷式土器」『論集弥生時代の地域社会と交流』転機第8号、地域と考古学の会
- 紅村弘 1956 「愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器との関係」『古代学研究』第13号、古代学研究会
- 紅村弘 2005a 「縄文文化末と弥生文化初期における人の移動と文化変容(1) 愛知県における理論と実態」『考古学ジャーナル』No. 529、ニュー・サイエンス社
- 紅村弘 2005b 「縄文文化末と弥生文化初期における人の移動と文化変容(2) 研究の経過」『考古学ジャーナル』No. 534、ニュー・サイエンス社
- 紅村弘 2005c 「縄文文化末と弥生文化初期における人の移動と文化変容(3) アイデンティティの視角」『考古学ジャーナル』No. 536、ニュー・サイエンス社
- 紅村弘・吉田富夫 1958 「名古屋市西志賀貝塚」『文化財叢書』第19号、名古屋市文化財保存委員会
- 紅村弘 1967 「水神平式土器とその周辺」『信濃』第19巻第4号、信濃史学会
- 小林行雄 1938 「弥生式文化」『日本文化史大系1 原始文化』誠文堂新光社
- 小林行雄 1939 「弥生式土器聚成図録正編解説」『弥生式土器聚成図録』、東京考古学会
- 小林行雄 1971 「三 弥生式土器論」『論集日本文化の起源——考古学——』平凡社
- 小林行雄・藤澤一夫 1934 「尾張西志賀の遠賀川式土器——西志賀弥生式土器の問題1——」『考古学』第5巻第2号、東京考古学会
- 佐原真 1967 「山城における弥生式文化の成立——畿内第I様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置——」『史林』第50巻第5号、史学研究会
- 重松和男・大江達子・近藤恵編 1988 「高蔵貝塚Ⅲ——1985年度夜寒地区発掘調査——」『南山大学人類学博物館紀要』第10号、南山大学人類学博物館
- 杉原荘介 1946 『原史学序論 第2版』葦茅書房
- 鈴木敏則 2017 「嶺田式土器とその前後」『三遠南信周辺における中期弥生土器と交流——稲作導入期の社会——』地域と考古学の会
- 田中克彦 1981 『ことばと国家』岩波新書
- 永井宏幸 2007 「条痕紋系土器様式の研究」『研究紀要』第8号、愛知県埋蔵文化財センター
- 永井宏幸・村木誠 2002 「3 尾張地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
- 溝口孝司 2018 「考古学は/で何をするのか」『現代思想』2018年9月号、青土社
- 森本六爾 1934 「西志賀弥生式土器号の後に」『考古学』第5巻第2号、東京考古学会
- 森本六爾・小林行雄 1939 『弥生式土器聚成図録 正編』東京考古学会
- 山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第1館第3、4号、東京考古学会
- 吉田憲司 1999 『文化の「発見」』岩波書店
- 吉田富夫 1933 「尾張國名古屋市西志賀貝塚に就いて」『考古学雑誌』第23巻第6号、日本考古学会
- 吉田富夫 1934a 「尾張國西志賀貝塚発見の土器に就いて」『考古学』第5巻第1号、東京考古学会
- 吉田富夫 1934b 「尾張國西志賀貝塚発見の土器に就いて(Ⅱ)」『考古学』第5巻第2号、東京考古学会
- 吉田富夫 1935a 「尾張に於ける弥生式文化の型と時期」『日本先史土器論 考古学評論』第1巻第2号、東京考古学会
- 吉田富夫 1935b 「尾三地方史前土器の一二の種類」『考古学』第6巻第1号、東京考古学会
- 吉田富夫 1936a 「美濃の弥生式文化に就いて」『考古学』第7巻第1号・第2号、東京考古学会
- 吉田富夫 1936b 「三河國の弥生式文化に就いて」『考古学』第7巻第7号、東京考古学会
- 吉田富夫 1937 「伊勢國の弥生式文化」『考古学』第8巻第6号、東京考古学会
- 吉田富夫 1941a 「尾張國知多郡師崎町汁谷の弥生式遺跡」『古代文化』第12巻第1号、日本古代文化学会
- 吉田富夫 1941b 「尾張西志賀貝塚における初期弥生文化の複合」『古代文化』第12巻第9号、日本古代文化学会
- 吉田富夫 1941c 「古代日本に於ける美術精神の發展」『日本文化の黎明 考古学評論』第4輯、日本古代文化学会
- 吉田富夫 1942 「弥生式土器に於ける縄文式裝飾技法の影響」『古代文化』第13巻第1号、日本古代文化学会
- 吉田富夫・杉原荘介 1937 「尾張天白川沿岸に於ける石器時代遺跡の研究(一)」『考古学』第8巻第10号、東京考古学会
- 吉田富夫・杉原荘介 1939a 「東海地方先史時代遺跡の研究」『人類学先史学講座』第13巻、雄山閣
- 吉田富夫・杉原荘介 1939b 「尾張天白川沿岸に於ける石器時代遺跡の研究(一)」『考古学』第10巻第12号、東京考古学会
- 吉田富夫・伊藤晃雄 1941 「三河丸塚弥生式遺蹟概報」『古代文化』第12巻第7号、日本古代文化学会
- 和島誠一 1947 「書評 杉原荘介著「原史学序論」」『歴史学研究』130、歴史学研究会(後に『日本考古学の發達と科学的精神』に収録)

Yayoi potteries from Nishishiga Remains —Ongagawa-type and striated potteries

KUROSAWA Hiroshi

This article introduces two types of pottery from Nishishiga Remains located in Kita Ward, Nagoya City; one is an earthenware of Early Yayoi period owned by Nanzan University Museum of Anthropology, the other is Jar-shaped earthenware of Middle Yayoi period owned by the Nagoya City Museum. These materials were first reported by Mr. YOSHIDA Tomio, before the Pacific War (World War II), and were used to construct the framework for understanding the Yayoi period of Tokai area. This means that these materials are important for the history of archeological study in this area. Together with reporting the materials themselves, Mr. YOSHIDA's study is reviewed in this paper. We suggest that the concept used in his study, "contact", can be applied for today's archeological studies. The concept is important because the human society has always repeated encounters and contacts with others, and therefore, we understand that various changes in culture and society occurred at the interface where contacts with others happened.

縄紋時代後期加曾利 B 式土器の研究（Ⅲ）

——加曾利 B2 式の理解のために——

大塚達朗

1. はじめに

小論は、南山大学人類学博物館所蔵資料・埼玉県寿能泥炭層遺跡表採土器資料のうちから、口縁部に三単位突起をもち胴部がくびれる加曾利 B2 式深鉢形土器（以下、平尾タイプ）の突起三例（図 1-1～3）を紹介するものである。そして、これから紹介する平尾タイプの突起も、寿能泥炭層遺跡第 2 次調査終了直後、新屋雅明（故人）と筆者が 2 週間ほどかけて当該遺跡の第 2 次発掘調査時に生じた廃土の山から表採したものの一部である。

前稿（大塚 2018a）では、表採された体部ソロバン玉状鉢形土器三例を紹介し、筆者の古・中・新の三細別を再整理し、優品としての様態を少し論じた。今回は、平尾タイプの突起を紹介し、旧稿（大塚 1984）の 6 段階案を改訂して 7 段階案を提示した上で、体部ソロバン玉状鉢形土器を優品として注目する所以を詳説するものである。

2. 表採された平尾タイプの突起

平尾タイプの突起（図 1-1～3）は、『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編（遺構・遺物）—』（以下、『寿能報告書』）に掲載された個体とはすべて別個体である。実測・トレースは、小泉翔太（京都大学大学院博士課程）によるものである。

1 の突起は、左右対称の肩部をもち、その上に逆円錐台状の頂部がのるもので、頂部を上からみると円形を呈し、その中央に円い凹みがある。角張った肩部上方には円形の凹みが左右に一つずつある。また、突起正面から裏面まで貫通する孔がある。

2 の突起は、頂部を上からみると、円い凹み二つが左右に列ぶものである。ただし、左側の凹みの右側にはそれに沿ってやや盛り上がる部分があり、突起頂部は上からみると左右非対称であることが分かる。図 2-

7 のように左右非対称なものである。

1・2 が黒褐色を呈するのに対して、3 は明黄褐色ないしは明灰褐色を呈する。3 の突起は、『寿能報告書』には掲載されていない種類のものである。頂部を上からみると円い凹みが左右に列ぶが、左側の凹みの方が大きい。しかも、その凹みの右側に沿って比較的大きく盛り上がる部分がある。それを正面からみると、左傾する短い円柱状ないしは筒状のものがみえるのである。正面観は左右非対称な歪なものである。3 は 2 の突起から正面観の歪具合がより増したものと捉えると、型式学的な説明ができると思う。

3 の突起を上からみた場合、右側の凹みがなくなると次の段階（図 2-6、8）であると型式学的に捉えるために、3 を 2 と図 2-7 の後に置き、3 の後に図 2-6、8 を置くのである（2 と図 2-7 ⇒ 3 ⇒ 図 2-6、8）。

3. 寿能泥炭層遺跡の平尾タイプの細別

筆者は、安孫子昭二が提案した平尾タイプの細別（安孫子 1971a・b、1978、1981）について、①基準となる土器資料の先後関係は突起の様相からみておおむね賛成であることを説いた。ただし、②各段階にどのような形態上や紋様上の変異があるのかその認識では異なり、また、③加曾利 B2 式の終末の基準土器に関しても異論があった。安孫子は平尾 No. 9 遺跡資料（安孫子 1971a、p. 145 〈第 65 図-12〉）を加曾利 B3 式に編年するが、加曾利 B2 式の終末ではないかと筆者は考えたのである。以上、賛成①・異論②③についての詳細は、拙論（大塚 1983）参照のこと。

1984 年の『寿能報告書』の考察編では、筆者は、賛成①・異論②③を踏まえて、寿能泥炭層遺跡の調査資料に基づき、新たな異論として④平尾タイプは 6 段階の変遷があり、また、各段階には複雑な変異があると説いた（大塚 1984）。しかし、大塚（1984）では図示がなかったために、筆者の主張は分かりにくかつ

たかもしれない。そこで、以下には、筆者が設定したかつての6段階の各段階の基準となる資料を図示して、諸賢の理解の一助としたい。

第1段階：図2-1～5

第2段階：図2-7

第3段階：図2-6、8

第4段階：図3-1・2、4～6

第5段階：図3-3、7

第6段階：図3-8

つぎに、今回紹介したものは、どの段階に対応するかというと、図1-1は第1段階となる。図1-2は第2段階である。第2段階は、よく知られた資料で説明すると、大谷場貝塚出土土器（安孫子 1981、p.146〈2大矢場〉）が該当する。蓼沼香未由（2004）が再実測したものがあるので、それを図4-1に掲載しておく。

図1-3は本論で初めて紹介した例で、既出資料から類例を探すと、王子ノ台遺跡例（秋田 1996、p.10〈図3-3〉）が該当する。この新資料の位置付けの前に、1984年の第4段階を説明したい。当該段階は、よく知られた資料で説明すると、小仙塚貝塚出土土器（安孫子 1971b、p.222〈第94図3〉）が該当する。蓼沼（2004）が再実測したものがあるので、それを図4-2に掲載しておく。

筆者は、突起の変化から、図1-3⇒図2-6、8〈1984年の第3段階〉⇒図3-1・2、4～6〈1984年の第4段階〉、と考え、かつ、図1-2、図2-7〈1984年の第2段階〉⇒図1-3、とも考えている。つまり、図1-3に着目すると、図1-2、図2-7⇒図1-3⇒図2-6、8⇒図3-1・2、4～6、という細別をみいだせることから、新たに7段階の変遷案を提示したいと考える（註1）。以下、参照。

第1段階：図1-1（新資料）、図2-1～5

第2段階：図1-2（新資料）、図2-7

第3段階：図1-3（新資料）

第4段階：図2-6、8

第5段階：図3-1・2、4～6

第6段階：図3-3、7

第7段階：図3-8

既出資料を踏まえて説明すると、第2段階は著名な大谷場貝塚資料（図4-1）が該当し、第5段階は著名な小仙塚貝塚資料（図4-2）が該当するものである。大森貝塚資料集（関（編）1980）刊行以降、該書と同じように、大谷場貝塚資料（図4-1）と小仙塚貝塚資料（図4-2）の先後関係を逆に考える向きがあるが、それは全く誤りであるといいたい。第1段階は、器

形的に内湾口縁に限定される体部ソロバン玉状鉢形土器・古段階に対応して、第5段階が体部ソロバン玉状鉢形土器・中段階に接点があると考え。だが、体部ソロバン玉状鉢形土器が単体の場合、内湾口縁は古・中・新と続くので時期認定は難しいなどあって、平尾タイプの第2段階から第4段階を体部ソロバン玉状鉢形土器の細別に対比するまでには至っていない。

平尾タイプの第6段階は、突起がそっくりなことから弧線紋系とは別に斜線紋系の一群があると考えてきた（大塚 1983、1984）。さらに付け加えることがある。たとえば、赤城遺跡（新屋ほか 1988）のA・E・F区12号住居跡資料（図4-3～8）をみると、体部ソロバン玉状鉢形土器（同図6、8）は肩部端が手法Bである。他方、平尾タイプ（同図3～5）は弧線紋系（充填縄紋はなく擦過痕のみ）の突起の様相は第6段階の図3-3と同じである。また、遠部タイプの鉢形土器（同図7）をみると、紋様帯を構成する斜沈線紋は、図3-7の平尾タイプの斜沈線紋とよく似ていると考える。そして、よく似ているという意味は体部ソロバン玉状鉢形土器の下半部の斜沈線紋に共に由来を辿れるという意味でよく似ているのである。

筆者がここで説く第6段階とは、平尾タイプとしてそっくりな突起をもつ弧線紋系（例、図3-3、図4-3～5）と斜沈線紋系（例、図3-7）が並存し、しかも、肩部端手法Bの体部ソロバン玉状鉢形土器（例、図4-6、8）が斜沈線紋系平尾タイプと同じ斜沈線紋を共有する段階（遠部タイプもある〈例、図4-7〉）と考える。換言すれば、体部ソロバン玉状鉢形土器・新段階（肩部端手法B）（大塚 2018a）と平尾タイプ第6段階と遠部タイプの三者が接点を有し、また、体部ソロバン玉状鉢形土器・古段階（肩部端手法A）（大塚 2018a）に起源を有する斜沈線紋が平尾タイプと遠部タイプで共有される様態といえるであろう（註2）。

山内清男が説く「中位の古さ」（山内 1967）は（大塚や新屋は遠部タイプと呼ぶ）、紋様帯を構成する斜沈線紋が体部ソロバン玉状鉢形土器・古段階（肩部端手法A）の体部下半の斜沈線紋に由来する斜沈線紋をもつ多様な器種構成の土器であることを指摘しておきたい。筆者は以前から肩部端手法Bの体部ソロバン玉状鉢形土器が遠部包含地遺跡（池上 1937）で遠部タイプに伴うと指摘してきたが（大塚 1983、1984）、西根遺跡（千葉県文化財センター（編）2005）の第4集中地点で遠部タイプの土器群と一緒に新段階の体部ソロバン玉状鉢形土器（肩部端：手法B・手法C）が多くまとまって検出されたことで確認できたと

考える（大塚 2018a）。

また、大森貝塚資料集は、該書でいう「遠部系列」すなわち遠部タイプは体部ソロバン玉状鉢形土器・古段階（肩部端手法A）（例、大塚 2018a, p. 37〈図2-3、5～9〉）の体部下半の斜沈線紋に由来することを、結果的に証明しているといえる。というのも、該書では、「遠部系列」の中に体部ソロバン玉状鉢形土器とは気づかずに「遠部系列」として斜沈線紋が解説される例が少なくとも二例（関（編）1980, p. 275・p. 278）あるからである。器形の区別をしなければ、各土器片の斜沈線紋はひとくりに扱われるものであることを結果的に証明したのである。そのことは、筆者にとって体部ソロバン玉状鉢形土器と遠部タイプを関連付ける大きな手がかりとなったことを付言したい。その内の一例（関（編）1980, p. 275）（図5-1）は、肩部端手法がBであるが、肩部端手法Bしか分からないために、加曾利B2式かB3式かは判断できない。もう一例（関（編）1980, p. 278）は、前稿で論じた（大塚 2018a, p. 40〈図5-7〉）。

重要なことは、山内清男が説く「中位の古さ」つまり遠部タイプは体部ソロバン玉状鉢形土器を基準にみた場合の三細別（古・中・新）のうちの新段階に限定される可能性が高いことである。しかも、遠部タイプの斜沈線紋は体部ソロバン玉状鉢形土器由来の紋様であることを考えると、加曾利B2式は体部ソロバン玉状鉢形土器を基準に資料を博捜するのが最優先と考える次第である。

さらに、優品として体部ソロバン玉状鉢形土器を評価する観点が必要であることは、前稿（大塚 2018a）で少し説いた。広く各地で作り続けるべき規範的な精製土器として体部ソロバン玉状鉢形土器を評価する観点という意味であるが、注意喚起したいのは、つぎのことである。寿能泥炭層遺跡では古・中・新の各段階で優品（手本）は多く、他方、優品（写し）は少しで、たとえば前にふれた西根遺跡の第4集中地点はその逆で、新段階に優品（手本）（例、図5-5〈肩部端手法C〉）は少しで、他方、優品（写し）（例、図5-2〈肩部端手法C〉、3・4〈肩部端手法B〉）は多い。そのような事象から判断して、体部ソロバン玉状鉢形土器にかかわる優品（手本）—優品（写し）という土器製作関係が関東にあるはずである、ということである。

詳しく説明すると、体部ソロバン玉状鉢形土器は、体部下半が斜沈線紋で構成されるものと、水平条線紋あるいは斜条線紋で構成されるものに分かれるよう

ある。その場合、斜沈線紋で構成されるものが手本となる側で作り続けられるもの（手本となるものを作り続けるということは手本を忠実に写し続けるということ）で、水平条線紋あるいは斜条線紋で構成されるものが写しを作る側で作り続けられるもの（写しとは手本をもとに斜沈線紋を水平条線紋あるいは斜条線紋で置き換えるという創発性が発揮されていること）と本論では見立てるのである。この見立ては、土器が社会的統合の機能を果たしているであろうという仮説を抱く筆者の見方ないしは見込みである（大塚 2000）。筆者は、観察者の視点から土器の形態・装飾の違いを斟酌して、器種構成をあれこれ論じてみても人為分類に過ぎないために生産的ではないという立場でもある（大塚 2000, 2018b）。他方、いま述べたように、各地の遺跡で手本と写しのどちらが多いかを探ることは、当時の社会の実態に迫る可能性が高いと考える。

平尾タイプ第6段階自体の話からかなりそれたので戻ると、第6段階は加曾利B2式の終末といえるが、最終末かは否か判断できない。筆者がここで説く第7段階は、突起が扁平化・簡素化した様相という安孫子の主張に一部同意するもので、頸部は斜沈線紋系が顕著となる段階（図3-8）である。

ところで、華蔵台遺跡29号住居跡（石井 2008a）の資料をみると、加曾利B3式の体部ソロバン玉状鉢形土器（肩部端B手法、下半斜沈線紋）（図5-6）の他に、平尾タイプの突起が第7段階のように扁平化・簡素化しているよううかがえるもの（図5-7・8）がまとまる。したがって、華蔵台遺跡の平尾タイプは第7段階に比定すべきものと思われるが、加曾利B3式の体部ソロバン玉状鉢形土器と共伴するのか、それほど確証があるわけではない。加曾利B2式末が、第6段階か第7段階か結論はまだ保留したいが、少なくとも第7段階とみるべき平尾タイプがあることは強調しておきたい。ちなみに、華蔵台遺跡29号住居跡の体部ソロバン玉状鉢形土器（図5-6）は優品（手本）の方である。

4. 精製土器・半精製土器

論点を整理すると、加曾利B2式の精製土器として等しく扱ってしまう土器群に対して、関東地方各地で作られるべき最上位のものこそを精製土器と見立て、広がりが限定的なものを半精製土器と見立てた場合、体部ソロバン玉状鉢形土器こそは最上位のもの・優品といえるであろう。前稿（大塚 2018a）は、そのこ

とを簡潔に述べた。本論では、前稿を受けて、体部ソロバン玉状鉢形土器に手本と写しの別があることを、初めて述べた。広く手本（斜線紋）と写し（水平条線紋あるいは斜条線紋による置換）が遺跡（例、寿能泥炭層遺跡〈手本多/写し少〉・西根遺跡〈手本少/写し多〉）において数量的に片寄りを呈しながらみいだせるからこそ手本—写し関係が立論できて、そして、体部ソロバン玉状鉢形土器は最上位のもの・優品といえるであろうという理路を辿った次第である。

他方、寿能泥炭層遺跡の新資料を用いて、平尾タイプのかつての6段階細別（大塚 1984）を本論で7段階細別に改訂した。7段階に細別できることは確実であると考えられるが、広がりが限定的なもので、平尾タイプは半精製土器とみるべきことになる。ただし、第6段階が加曾利 B2 式の最末か否か、第7段階こそが最末か否か、判断は保留した。

第6段階に体部ソロバン玉状鉢形土器に由来する斜沈線紋を持つ例が弧線紋系に並存することを指摘したが、同じく体部ソロバン玉状鉢形土器由来の斜沈線紋土器（各種器種をもつ）である遠部タイプも出現して並存するのであるから、半精製土器のカテゴリー操作も慎重におこなわれるべきであろう。

ここで強調したいことは、①遠部タイプの時期が限定的であることと、②主紋様である斜沈線紋の由来が体部ソロバン玉状鉢形土器の斜沈線紋であるということである。と同時に、③いろいろな器種をたずさえて遠部タイプが出現する経緯は筆者にはよく分からない。この三点は、さらに論究する必要があるが、ここでは省略する。

5. まとめ

まず、加曾利 B2 式は、優品である体部ソロバン玉状鉢形土器で定義するべき、というのが前稿（大塚 2018a）および本論をあわせた最終的な結論である。また、優品とは手本—写し関係に由来するもので、平尾タイプとの並行関係如何とは別の事態である。安孫子昭二（1971a・b、1978、1981）以来、平尾タイプの細別研究は多く出されているが、半精製土器としてみるべきもので、加曾利 B 式全体の理解の手がかりにはならない。つぎに指摘したいのは、山内清男の『日本先史土器図譜』の標本と記載は、加曾利 B 式に限れば照射範囲が狭いことである。本論で既述したように、体部ソロバン玉状鉢形土器の理解がないと遠部タイプ・加曾利 B 式「中位の古さ」は説明できないの

である。

ところで、年代学的の単位（「地方差、年代差を示す年代学的の単位」〔山内 1932、p. 41〕）である型式は、「偶発性」を見込んだ概念であり、“予定表”を持たないのであるから、型式の一回性を見込むべきである故に（大塚 2018b）、加曾利 B1 式とは何か、加曾利 B2 式とは何か、加曾利 B3 式とは何か、それぞれ固有の脈絡・背景などを読み解くことで果たすべきであろう。

この志向は、山内清男に代表される縄紋土器実在論（一つの由来を共有する土器群が各地で連続と作り続けられる仕組みが実在し〔=縄紋土器一系統説〕、各地各時期の型式は漸進的な変化を呈してみな等価で、むしろ当該仕組みこそ歴史的意義〈“縄紋国”〉がある）とは違って、縄紋土器唯名論（各地各時期の型式は、それぞれ固有な一回性の事象でそれぞれに歴史的意義があり、縄紋土器とは名ばかりである）と呼ばば、分かりやすいかもしれない。

なお、I（大塚 1983）・II（大塚 2018a）・III（本論）と加曾利 B 式論を続けて来たが、寿能泥炭層遺跡調査にかかわることから I を始め、報告書が刊行された上に、当該遺跡の表採資料中、加曾利 B2 式の細別にかかわる重要な新資料などを II と III で提示したので、III で締めくくりにする。すでに加曾利 B1 式に関しては「の」の字単位紋で加曾利 B1 式を定義する旨の論を別立てで起稿している（大塚 2004）。加曾利 B2 式や加曾利 B3 式についても、I・II・III の中で論点を提示するだけでなく、資料博搜の上別立てで立論すべきであろうと考えるためであり、縄紋土器唯名論に立つならば、なおさらである。

文末であるが、黒澤浩教授・土居通正博士・建石徹博士・川添和暁博士・長田友也博士・小泉翔太京大院生・西村広経東大院生には謝意を表したい。

註

- (1) 君嶋論樹は、平尾タイプの突起について、王子ノ台例（秋田 1996、p. 10 〈7 図-3〉）⇒宮久保例（長岡ほか 1987、p. 121 〈第 77 図-283〉）⇒石神貝塚例（新屋 1997、p. 37 〈第 23 図-3〉）という組列を提示した（君嶋 2006、p. 31 〈第 5 図〉）。その組列は賛成であるが、王子ノ台例を加曾利 B2 の第 1 段階とみなすなどは反対である。筆者は、突起の特徴から王子ノ台例は本論で新たに説く第 3 段階、宮久保例は第 4 段階、石神貝塚例は第 5 段階と考える。
- (2) 西村広経（2018a・b）によって、体部ソロバン玉状

鉢形土器が福島県町 B 遺跡 19 号住居跡で出土したことを知った。西村は、東北地方の後期中葉土器群を 3 段階に再整理する案を提示し、町 B 遺跡出土体部ソロバン玉状鉢形土器を第 2 段階並行にあてた。当例は肩部端手法 B で、加曾利 B2 式・新段階例と思われる。ただし、それが優品（手本）かあるいは優品（写し）かは、判断を保留したい。

引用・参考文献（必要最小限にとどめる）

- 秋田かな子 1996「南関東西部の加曾利 B 式土器—構造の理解に向けて—」『第 9 回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』、谷藤保彦・関根慎二（編）、縄文セミナーの会、pp. 1-41。
- 安孫子昭二 1971a「第三章 遺跡各説 第 4 節 平尾 No. 9 遺跡 6）縄文後期中葉の土器」『平尾遺跡調査報告 I』、平尾遺跡調査会、pp. 132-174・197-198。
- 安孫子昭二 1971b「第四章 考察 第 3 節 加曾利 B 式土器の変遷」『平尾遺跡調査報告 I』、平尾遺跡調査会、pp. 221-228。
- 安孫子昭二 1978「V 日本考古学における編年研究の成果 2 縄文式土器の型式と編年」『日本考古学を学ぶ (1) 日本考古学の基礎』、有斐閣選書 大塚初重・戸沢充則・佐原 眞（編）、有斐閣、pp. 170-188。
- 安孫子昭二 1981「縄文後期の土器 関東・中部地方」『縄文土器大成 3—後期』、野口義麿（編）、講談社、pp. 144-152。
- 新屋雅明 1997『川口市 石神貝塚 県道大宮鳩ヶ谷線関係埋蔵文化財発掘調査報告』、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 182、埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
- 新屋雅明 2015「第 1 章 加曾利 B 式土器の再検討」『縄文時代後・晩期土器編年の研究—加曾利 B 式—安行式土器群の変遷—』、六一書房、pp. 1-95。
- 新屋雅明ほか 1988『赤城遺跡 川里工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告』、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 74、埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
- 池上啓介 1937「千葉県印旛郡白井町遠部石器時代遺蹟の遺物」『史前学雑誌』9(3)、pp. 133-164。
- 石井 寛 2008a『華蔵台遺跡（第 1 分冊）』、港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 41、横浜市教育委員会。
- 石井 寛 2008b『華蔵台遺跡（第 2 分冊）』、港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 41、横浜市教育委員会。
- 大塚達朗 1983「縄文時代後期加曾利 B 式土器の研究（I）—最近の成果の検討と新たな分析—」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』2、pp. 181-227。
- 大塚達朗 1984「17. 寿能泥炭層遺跡出土加曾利 B 式土器の様相」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編（分析調査・考察・総括）—』、埼玉県立博物館（編）、埼玉県教育委員会、pp. 821-829。
- 大塚達朗 2000『縄紋土器研究の新展開』、同成社。
- 大塚達朗 2004「「の」の字単位紋考—加曾利 B1 式の理解として—」『縄文時代』15、pp. 117-142。
- 大塚達朗 2018a「縄紋時代後期加曾利 B 式土器の研究（II）—加曾利 B2 式の理解のために—」『南山大学人類学博物館紀要』36、pp. 31-42。
- 大塚達朗 2018b「縄紋土器型式と“予定表”」『縄文時代』29、pp. 1-23。
- 岡崎文喜・新津 健（編）1978『八祖遺跡—縄文時代後期包含地の調査—』、八祖遺跡調査団。
- 君嶋論樹 2006「縄文時代後期中葉における土器型式の構造と変化—西関東と中部を分析の中心として—」『考古学集刊』2、pp. 23-42。
- 埼玉県立博物館（編）1984a『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編（遺構・遺物）—』、埼玉県教育委員会。
- 埼玉県立博物館（編）1984b『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編（分析調査・考察・総括）—』、埼玉県教育委員会。
- 埼玉県立博物館（編）1984c『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編（写真図版）—』、埼玉県教育委員会。
- 関 俊彦（編）1980『大田区史（資料編）考古 II』、東京都大田区。
- 蓼沼香未由 2004「大谷場と小仙塚—加曾利 B 式土器の再報告—」『利根川』26、pp. 27-31。
- 千葉県文化財センター（編）2005『印西市西根遺跡—県道船橋印西線埋蔵文化財発掘調査報告書—』、千葉県文化財センター調査報告 500、千葉県文化財センター。
- 長岡文紀ほか 1987『宮久保遺跡 I』、神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 15、神奈川県立埋蔵文化財センター。
- 西村広経 2018a「十腰内 2 式土器の再検討」『東京大学考古学研究室研究紀要』31、pp. 17-46。
- 西村広経 2018b「東北地方における横帯文の系譜」『八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館研究紀要』7、pp. 15-36。
- 山内清男 1932「日本遠古之文化 一 縄紋土器文化の真相」『ドルメン』1(4)、pp. 40-43。
- 山内清男 1967『日本先史土器図譜 第一部・関東地方・I ~ X II 集（1939 ~ 1941）』、再版・合冊、山内清男・先史考古学論文集 6 ~ 10、先史考古学会。

（南山大学人文学部教授）



図1 寿能泥炭層遺跡表採の平尾タイプの突起 (s=3/5)

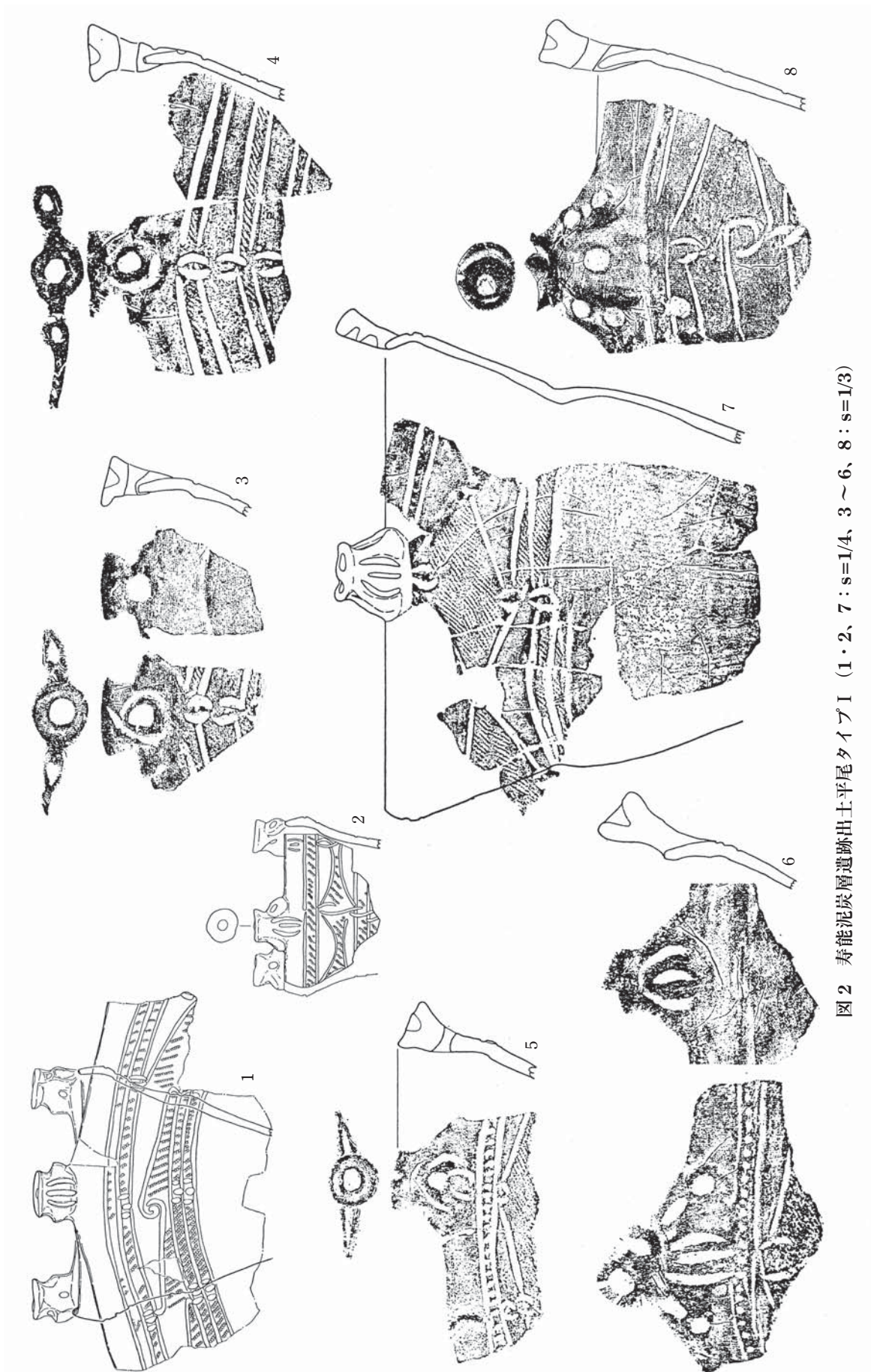


図2 寿能泥炭層遺跡出土平尾タイプI (1・2、7 : s=1/4、3～6、8 : s=1/3)

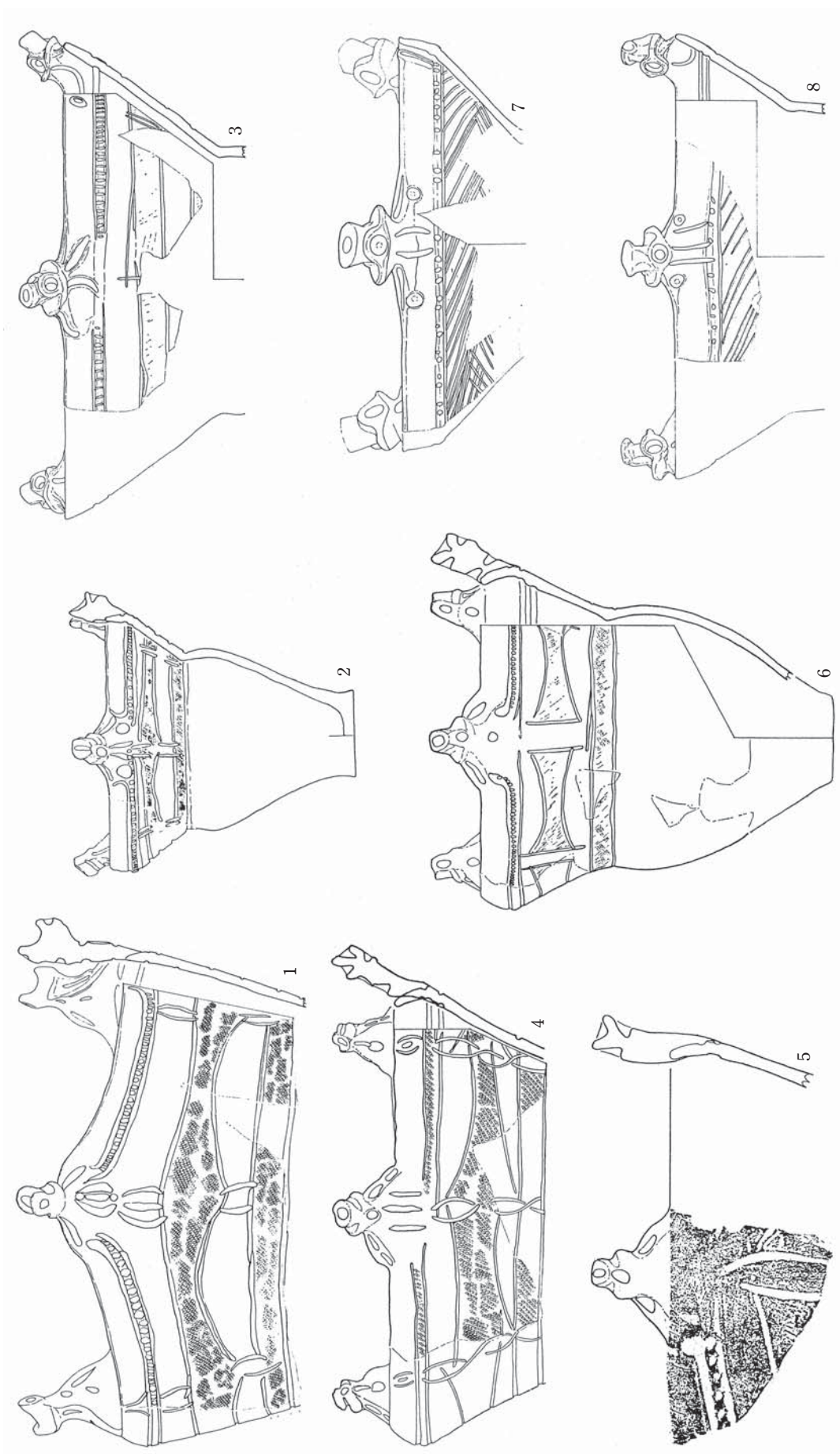


図3 寿能泥炭層遺跡出土平尾タイプII (1~4、6~8 : s=1/4、5 : s=1/3)

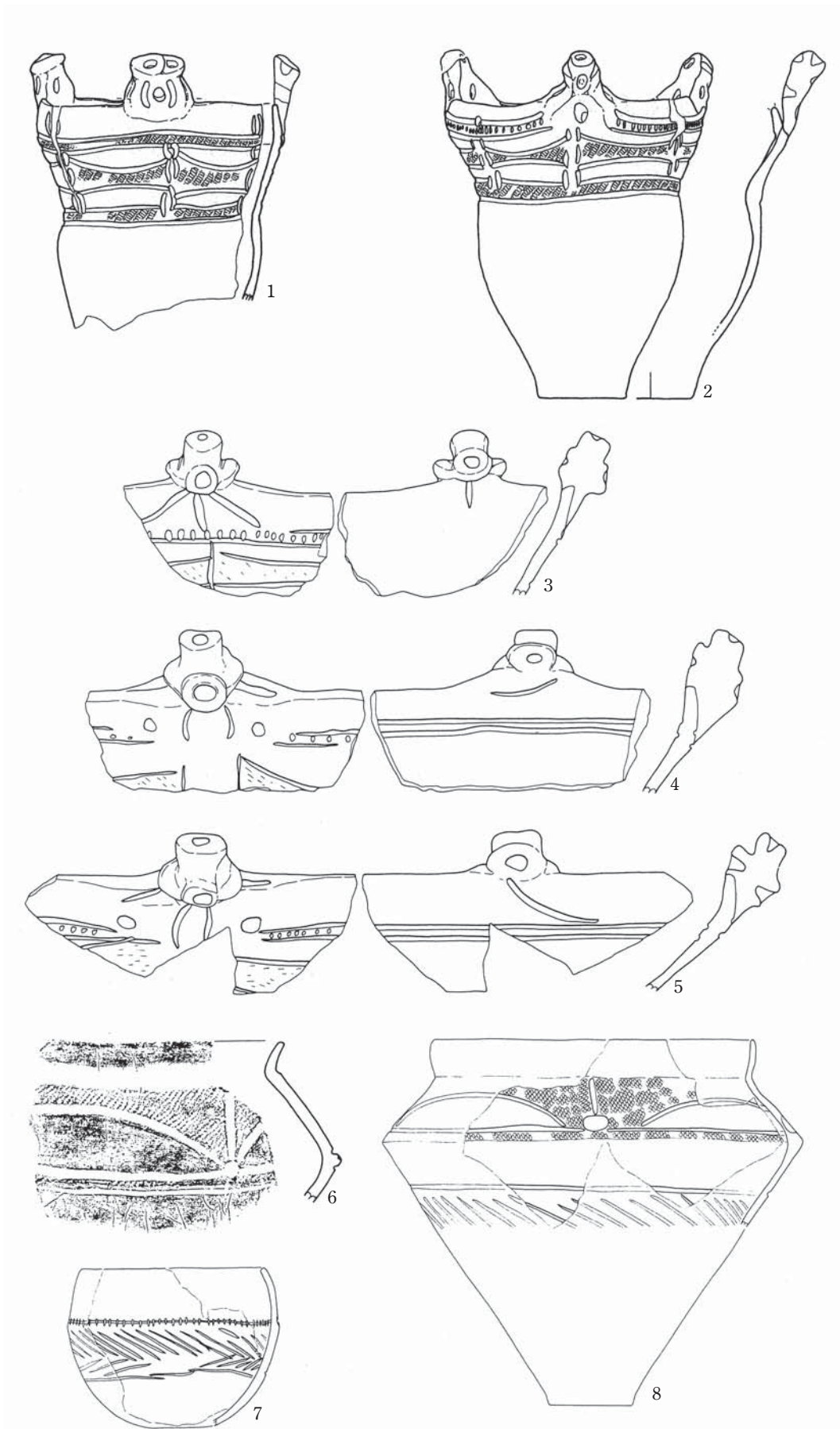


図4 関連資料I (1大谷場 $s=1/4$、2小仙塚 $s=1/4$、3~8赤城 $3\sim 6:s=1/3$、7・8: $s=1/4$

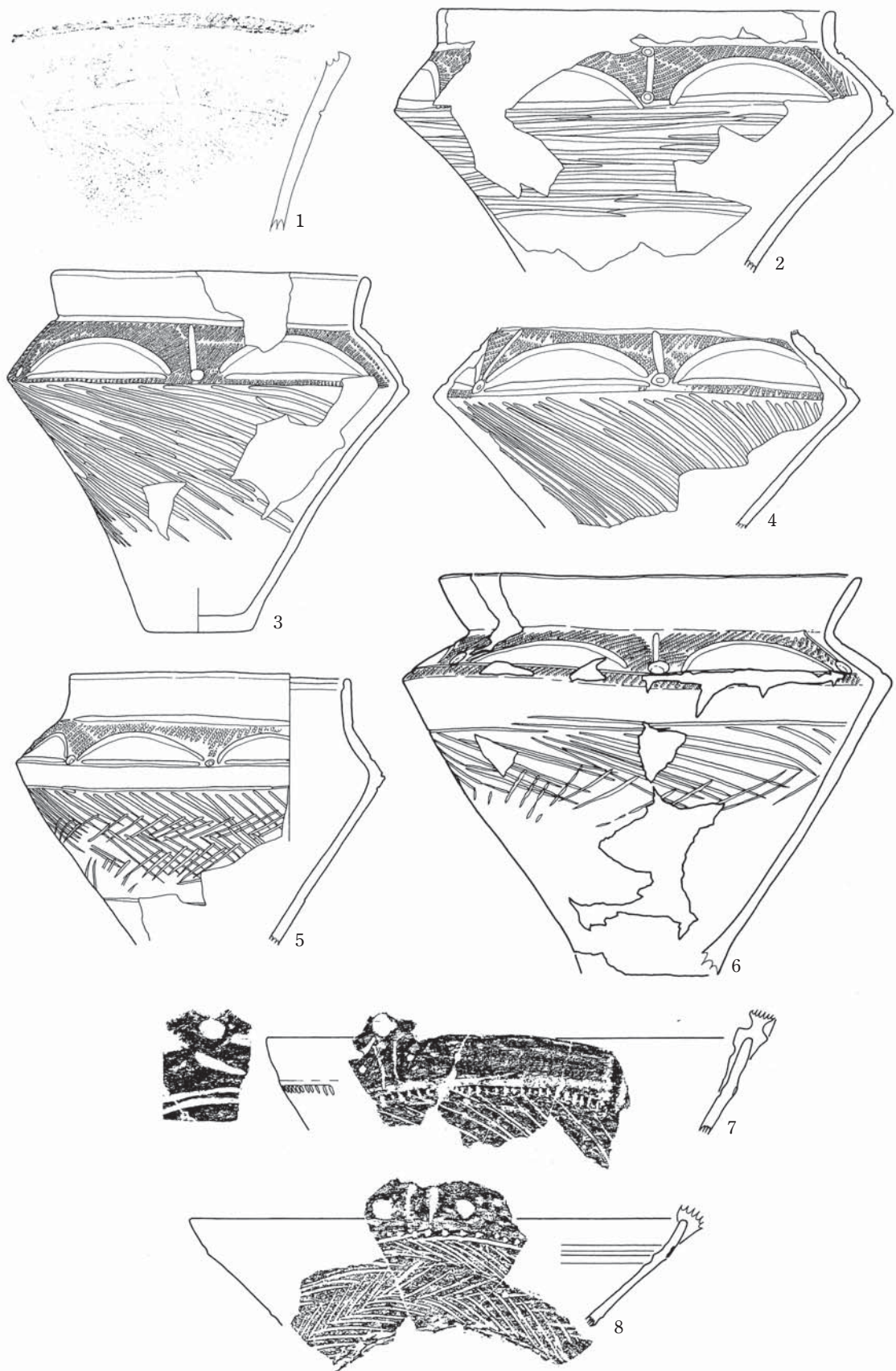


图5 関連資料Ⅱ (1大森貝塚 $s=1/3$)、2~5西根 $s=1/4$)、6~8華藏台 $s=1/4$)

A typological approach to Kasori-B type pottery of the Late Jomon period (III)

OTSUKA Tatsuro

In this article, it is demonstrated that the Kasori-B2 type is most appropriately defined with reference to abacus-bead-shaped bowls.

2018年12月17日 印刷

2018年12月21日 発行

南山大学人類学博物館紀要 第37号

編集・発行人 南山大学人類学博物館

466-8673 名古屋市昭和区山里町18

Phone 052(832)3147 (直通)

印刷 株式会社クイックス

456-0004 名古屋市熱田区桜田町19-20

Phone 052(871)9190